



序章

咲子は帰宅後、制服のままベッドに横になった。

うつぶせで寝そべり、携帯でゲームをしていたところ、そのまま疲れでうたた寝してしまっらしい。気づくと、枕カバーに大きな染みが出来ていた。どう見てもよだれである。

寝起きの冴えない頭を搔きながら、ティッシュペーパー数枚を広げて枕に押しつけた。とりあえず、よだれだけ乾いてくれればいい。

ここで、携帯がけたたましく鳴り響いた。着メロはシューベルトの『魔王』。吉村からの着信用に設定したメロディだったが、これはこれで心臓に悪い。咲子はため息を吐きながら通話ボタンを押した。

『咲子さん。窓の外を見てごらんよ』

吉村の興奮したような声を聞きながら、咲子は小指で耳穴をほじった。まともな受け答えすら面倒だった。

『あれ。咲子さん、聞いている？』

このまま通話を切ってしまうかと思論んだが、何故だか妙にいらっときてしまったので、咲子はこの不機嫌を精いっぱい声色で表現した。

「ねえ吉村くん。何度も言うようで申し訳ないけど、咲子さんって呼ぶのいい加減止めてくれないかなあ」

『なんで？ 咲さんは咲子さんでしょ』

「うん、そうなんだけどね。あたしがこういう名前なのがいけないってのは重々承知なの。でも、咲子さんってどうかなあ。なんかさ、その辺にいるおばちゃんみたいじゃん」

それに対しての吉村の返事はなかった。受話器越しに首でも傾げているのだろう。

『ねえ、それより咲子さん』

咲子はうらぶれたようなため息を吐いた。

『窓の外を見てよ』

「ああ、窓？」

ベッドから起きあがりつつ、ベージュのカーテンを荒っぽく引く。ガラスの先には、夜空にぽっかりと浮かぶ満月があった。周囲には余計な星屑すらなく、そのせいか、黄金色に存在を主張する円形には、さすがの咲子も感嘆の声をあげざるを得なかった。

『どうだい。綺麗なお月さまだろう』

「こりゃあ、また。あたしの生涯トップテンに入っちゃうかもね」

『だろ。ビンビンだろ』

「うん、ビンビ……ビンビン？」

『この満月を見てるとさ、何かビンビンに感じてこない？ 僕なんかもう、ほら、さっきからビンッピンなんだけど』

全身に鳥肌が立ってきた。

「それはなにかな吉村くん。セクハラってやつかな。このあたしがせっかくロマンチックな気分

に浸っていたというのに。あーあ、萎えた。もう切るわ」

『あー待て待て！ 違う、そういう意味じゃな——』

かまわず電話を切る。二秒後にまた掛け直された。

『ビンビンに感じるというのは、つまりだね』

「つまり？」

咲子は通話ボタンに指を掛けながら聞き返す。また下らない隠語だったら、もう一回速攻で切ってやるつもりだった。

『悪い予感のことだよ』

無意識のうちに指がボタンから離れる。頬の筋肉が引きつった。

「今度はどんな漫画の影響かなあ、吉村くん」

『綺麗な満月の夜ってのは犯罪が起こりやすいんだ。咲子さん、早速見回りしてきて。もしかしたら本物に出会えるかもしれないよ』

咲子はがさつに後頭部を搔きむしった。

「まさか、こんな時間からあたしをこき使うつもり？ いい加減にしてよね。明日だって早朝から朝練が、」

『文芸部の朝練ってなに？ いいからさっさと行けよ』

吉村の口調が急に変わって咲子はたじろぐ。意を決して何か言い返そうとしたが、もうすでに通話は途切れていた。

外に出ると、咲子は仄暗い闇夜の満月を見上げた。あの電話から家の玄関を開けるまで、計二十一回の舌打ちをしたが、帰る頃には舌が擦り切れているのではないかと思った。

とりあえず飴玉を口に放り込む。これで舌打ちも多少は抑えられる。

それで、犯罪の予感ってなんだろう。咲子はあてもなく歩きながら真剣に考えた。吉村は確かにそう言っていたが、超能力者じゃあるまいし、彼自身にそんなものを嗅ぎ分けられるとは思えない。いい加減な憶測ばかり立てておいて、あとの運否天賦はいつも咲子に丸投げだ。なにも起きなかつたら起きなかつたで、なじられる対象がいつも咲子なのだからたまったものじゃない。

犯罪なんかに出会いたくない。そうは思ってみても、やっぱどっかで起きてくんなきゃ困るんだよなあ。地味に彼女の中で願望の小競り合いが勃発していた。

飴玉を三個消費したところで、ある人だかりが目にとまった。

偶然入った細い路地の一角。十数人ほどの野次馬集団が見受けられ、彼らの間から、ちらりと黄色い規制テープが覗いていた。

「まじか」

吉村くんってのは、ほとんど見上げた予言者だ。そんであたしは体現者だ。

咲子はすぐさま吉村の携帯にコールする。

「事件起きてますよ。ばっちり」

『窃盗？ 殺人？』

「わかんない。場所は二丁目の……あー、どっかその辺の狭い路地」

『ずいぶん適当だけど、まあいいや。僕もそっちに向かうから、咲子さんは周辺歩き回ってみて』

「はいはい」

携帯を閉じ、咲子はあくびをしながら歩き始めた。

そこから百メートルほど歩いたところに森林公園がある。真白ヶ丘町、唯一無二の観光名所だ。この町の見所は全てそこに集約されていると言っても過言ではない。

県営林の中に開発されたそこは、約二百ヘクタールの敷地を有しており、およそ百二十種類ほどの野鳥が生息している。日中はほぼ十割の確率で双眼鏡やカメラを提げた野鳥マニアたちを見かけられる。

その他にも、芸術家がデザインしたという一風変わった広場があったり、お子様ようこそなアスレチック施設があったり、カップル御用達の隠れ家レストランがあったり、幅広い層の心をがっちり驚掴みにしてしまう公園だが、一方、咲子のような対人能力に難のある一部の方々には頑として敬遠される、いろんな意味でもこの町一番の名地だった。

とはいえ、この時間ともなれば人の気配はほとんど無い。

昼と比べれば見違えるほど寂寥としたアスレチックを横切り、野鳥さえも眠りに落ちた無音のウォーキングコースを徘徊する。

「オニさんこちらー、手の鳴る方へー」

咲子が何気なく口ずさんだ歌声は、すぐに林の中に埋もれて吸い込まれる。六個目の飴のビニールを破り、カエルの鳴き喚く池へと放り投げる。丸太の柵に上半身を預け、波紋の消えゆく様を眺めた。

ポケットの携帯が震える。スカートをばしっと叩いて黙らせようとしたが、もちろん徒労に終わり、携帯が大人しくなるまでただじっと池を見つめた。

静寂が耳をついた頃、咲子は改めて歩き出す。

一面の人工芝が生えそろった広場に出る。ふと、彼女はある場所へと目を向けた。

この公園に入って、初めて人の姿を発見したのだ。その人物はこちらに背中を見せ、広場の片隅の木製ベンチに一人で腰掛けていた。

おそるおそる、近づいてみる。体格からして、小学生か中学生。肩あたりまで伸びたセミショートの髪型。性別は女の子だろう。

咲子はそばにあった自販機に五百円を突っ込んだ。オレンジジュースのボタンを二回押す。何故か、無糖のコーヒーが二本出てきた。

自販機に対して抗議したい気持ちを抑え、我慢してコーヒー缶二つを引っ掴み、徐々に女の子の背中へと歩み寄っていく。

彼女はまだ咲子の存在に気づいていない。こじんまりと木製ベンチの上に座り込んでいる。咲子は視線を落とした。

女の子のちょうど真下、ベンチと地面の間に、エナメル製のスポーツバッグが置かれていた。丸みがなく、やけに立方体に角張ったバッグ。

いや、と心の中で首を振る。ただのスポーツバッグではないのだろう。

女の子の二メートルほど背後で、わざと足音を立てて立ち止まる。女の子がはっとして振り返った。その目は怯えに見開かれていた。

どうすべきかと迷ったが、ともかく、咲子は慣れない愛想笑いを浮かべてみた。

「あー、こんばんは。えっと、小学生かな」

女の子は首を振った。小さな顔とは対称的に大きく開かれた瞳。瞳孔がふるふると小刻みに揺れた。ちゅ、と女の子は短く言って、唇を動かす。

「ちゅ、中三です」

「どうしたの、こんな時間に。迷子？」

女子中学生はためらうように視線を逸らし、ゆっくりとうなずいた。

早く終わらないかな、とわたしは思った。

ホワイトボードにペンを立てながら、青木先生が大げさに英単語のジェスチャーを示した。その発音がやけに耳障りで、わたしは授業を聞くふりをして、そっと英語の教材へと目を落とした。

桃太郎の和訳問題だ。もう中学三年生の春なのに、どうして一年のときの復習なんかするんだろう。

「高校受験の対策前に、まず基礎を固めておきましょう」

一週間前、青木先生がそう告げたとき、教室内が一気にしらけていくのが分かった。よもや、偏差値六十五以上の生徒が集まるこの倉田塾で、しかもそれぞれ親から高い授業料まで出してもらっているのに、それはないよ。

基礎なんてたぶん、少なくともわたしの塾内の友達はみんな、じんましんや汗疹が出るまでやり尽くしたと思う。わたしだってその一人だ。

「おうが」

青木先生が口をとんがらせて発音した。いらいらして、思わずシャーペンをへし折りたくなかったけど、私はぐっと我慢した。

教材のあるページに描かれた赤鬼の絵を見つめる。桃太郎に追いかけられ、赤鬼は半泣きで金棒をほっぽり出していた。

そんな赤鬼の姿に、わたしは得も知れぬ不安感を抱く。どうして鬼は、鬼ヶ島から追い出されなくちゃいけないのか。どうして鬼は、鬼であるという理由だけで退治されなくちゃいけないのか。それを考えると、ほんとうに身も凍る思いだった。

わたしはこの塾にいるあいだ中ずっと、この赤鬼みたいにならないよう、頑張ってきた。

何故なら、鬼とはつまり、周りから外れた人物だからだ。周りから外れるというのは環境や条件によって様々だけど、この倉田塾においてはただ一点、鬼とは勉強についていけなくなった生徒のことを指す。

鬼になった者は得てして迫害を受ける。実際、現代社会でそこまで露骨な迫害なんてあり得ないけど、言葉や行動で示さない迫害というのは確かに存在する。

具体的に言えば、周りから見下されたり、それとなく仲間外れにあっちゃったりするわけだ。勉強が出来ないという事は、イコール駄目な人ってことで、いや、もはや人として扱ってくれないのかも。これは大げさなんかじゃない。だって、塾って学校とは違って、先生たちに義務や責任がない。出来ない子は、もういいや、はい、先に進みますよって。それでおしまい。

青木先生の授業を受けていて、ふとわたしは、ある別の不安を抱き始めていた。

この下らない基礎復習の間に、もし他の子に差をつけられちゃったら。

わたしはページをめくった。どンドンめくって行って、やがて、高校一年の終盤あたりの頁まで到達させた。シャーペンを持って、うんうん唸ってみる。高校英語はやっぱりレベルが高くて、文法の応用も中学英語とは裾野が段違いだった。分からないところもいっぱいあったけれど、

でも、自力でここまで頑張ってみせた。

でも、どうだろう。わたしより頑張ってる子なんて、本当はいっぱい居るんだろうな。

わたしはぎゅっと目をつむり、ネガティブな妄想を振り払うことに躍起になった。こうやって安易に他人と比べても意味ないよ。わたしにはわたしのペースが、

「えー、じゃあここ。三崎」

名前を呼ばれ、ぎょっとして顔を上げる。青木先生がきょとんと首を傾げた。

「どうした、はやく訳してくれ」

わたしは固まってしまった。だって、授業なんてぜんぜん聞いていなかった。そんなわたしの様子に青木先生は眉をひそめる。突然遠目になって、わたしが開く高一英語のページを舐めるように見た。

「お前だけじゃないか？ そんなに焦って前に進もうとするやつは」

わたしはしばし呆然としたが、すぐに顔を下に向けた。周りの子たちの、迷惑そうな視線を感じたからだ。これじゃあ、わたしを馬鹿にして笑ってくれた方がよっぽどましだ。

なにごともなく授業が再開される。みんなの集めた視線の幻影が、瞼の裏に張り付くかのようだった。

恥ずかしい、消えてしまいたい、純粋にそう思った。

我慢できなくなって、わたしは先生の目を盗んで、そっと席を離れた。隣の席の子たちがわたしの挙動をまじまじと見てきたが、知らんぷりを決め込んだ。

廊下に出て、急いでトイレに走った。

外れるのが怖いばかりに、なんて醜態をさらしてしまったのだろう。

トイレの個室でうずくまり、わたしは頭を抱えた。この塾にいる限り、いつもこれの繰り返しだ。焦りと先走りと自己嫌悪の連続。それで結局、わたしは何も身につけずに終わってしまう。このままじゃ、あのときと同じになる。

中学受験のときみたいに、また墓穴を掘ってしまうんだ。

そのとき、個室のドアがこんこんと叩かれた。無視したけど、ノックはしつこく鳴らされた。

諦めてわたしはドアを開錠し、ドアノブに手をかける。

開けてみると、そこに居たのは、なんと奈緒ちゃんだった。

「大丈夫？ 小夜

さよ

ちゃん」

わたしは真っ赤になって何も言えなかった。奈緒ちゃんは肩をすくめ、呆れるような仕草をした。

「さっきのなんて、気にしない方がいいよ。悪いのは青木先生なんだから。今さら中一の復習でしょ。あれで焦るなっていう方がおかしいのよ」

「奈緒ちゃんもそう思う？」

わたしはうれしくなって、奈緒ちゃんの手を取った。白くて弾力があって、わたしの大好きな奈緒ちゃんの手だ。

「私だってかなり焦ってるもん。小夜ちゃんほどじゃないけど、私だって勉強頑張ってるのよ」
奈緒ちゃんがわたしの手を握り返してくれて、私はうれしさのあまり、立ちくらみしそうになった。それがばれないように足下をこらえて立ちなおす。

「そんな、わたしなんて……」

「謙遜しないでよ。小夜ちゃんは誰よりも努力しているじゃない。この前の模試は、私のまぐれ勝ちだったけど、あなたの頑張り具合は教室内でも恐れられているのよ」

奈緒ちゃんはこうして、わざと話を大きくしてお世辞を言ってくる。それがうれしかったり、ときどき嫌味に聞こえたりするけれど、今のわたしの頭にお世辞なんて言葉は浮かばなかった。

わたしはそっと、握られた手を見下ろす。奈緒ちゃんの、寒気を覚えるほど美しい指の形状を見つめた。

「そうだ、小夜ちゃんに渡したいものがあったんだ」

奈緒ちゃんが手を離した。口惜しかったけど、彼女がポケットから出したものを見た瞬間、わたしの意識は完全にそちらに向いた。

「私が今度出演する、演奏会のチケット。小夜ちゃんのために、ママが委員会に掛けあって手配してくれたのよ」

わたしは渡されたチケットを持ったまま硬直した。記載された座席位置が、最前列の待遇席だったのだ。奈緒ちゃんは照れ笑いをして、わたしの肩をぽんと叩いた。

「何を驚いているのよ。私たち、親友でしょ？」

くさいことを言ったのが恥ずかしくなったのか、奈緒ちゃんはこちらを回って背中を見せた。絶対来てよね、そうつぶやくと、一目散にトイレを出ていった。

わたしはチケットを広げたまま、しばらくその場を動くことが出来なかった。

奈緒ちゃんという女の子は、わたしのお母さんの次に完璧な人物だと思う。

今まで倉田塾の中でしか関わりはなかったけれど、塾のテストはほぼ満点だし、いつも成績上位にいるし、見た目だって結構かわいい。なにより一番に、彼女はピアノの天才だ。

三歳で初めて鍵盤を叩き、彼女は当時九歳で世間からの注目を浴びた。大人にだって習得困難な曲を難なく弾いてみせ、九歳にして旋律に感情を乗せる技術を見出ししていた。

わたしがもっとも奈緒ちゃんに注目したのは、あの小枝のように長くほっそりとした色白な指である。

演奏自体もそうだけど、テレビで奈緒ちゃんを見かけるたびに、彼女の手元に見とれた。奈緒ちゃん本人には言ってないけど、実はわたし、ずっと幼いころから奈緒ちゃんを知っていたのだ。

彼女と初めて塾で顔を合わせたとき、わたしは表では平常を装いながらも、内心どきどきしっぱなしだった。あの憧れの女の子のそばに居られるなんて。その日の晩は本当に、興奮して中々

寝付けなかった。

ピアノの演奏会が終わって、わたしと奈緒ちゃんはゲームセンターでプリクラを撮った。奈緒ちゃんママが「私も混ぜて」って言ってきたけど、奈緒ちゃんが、

「小夜ちゃんと二人っきりがいいの」

ってきっぱりと断ってくれた。

家に帰ってからも、わたしはずっと、奈緒ちゃんと一緒に撮ったプリクラを眺めていた。

奈緒ちゃんが、写真の中でピースしていたのである。

ピアノ経験者がピースをするとき、普通の人では見られないくらい、人差し指と中指が、ぐんっ、と特徴的に開く。奈緒ちゃんは身長こそ低いものの、その分、指は長くて筋肉も柔らかかった。

奈緒ちゃんの作るひどく鈍角なVサインを見つめながら、わたしはにやにやしたまま目を閉じた。目を閉じると、奈緒ちゃんの演奏が頭の中で流れた。もちろん、せわしなく動く両手の映像つきだ。あの素敵な指先が、あの素敵な演奏を創り出す。なんて尊く、なんて価値のある手なのだろう。

奈緒ちゃんが完璧じゃないと知ったのは、それから数日後のことだった。

わたしはその日、学校を終えて急いで塾に走った。授業が始まるまで、教室で奈緒ちゃんとゆっくりお話したいと思っていた。

教室に入ったけれど、奈緒ちゃんはまだ来ていなかった。他の子もほとんど居なかったし、わたしが早く来すぎただけなんだと思い、わたしはひとまずトイレで時間をつぶすことにした。教室内では携帯をいじっちゃいけないので、トイレの中で奈緒ちゃんにメールを打とうと思ったのだ。

しかし、わたしはトイレの入り口前で足を止めた。中から、奈緒ちゃんと他の子たちの会話が聞こえたのである。

そのときの彼女たちの会話は、今となってはもう、うまく思い出すことも出来ない。しかし、わたしの陰口を言っているのだということは、会話の内容自体より、身体の芯に響いてよく染み込んだ。だって、陰口の話提供が、奈緒ちゃんだったからだ。

「笑っちゃう。あの子、チケット渡しただけで赤くなっちゃうのよ」

わたしってそんなに赤くなっていたかな、と首を傾げる。

「私、ただ自慢したいだけだったんだけどなあ」

奈緒ちゃんって、これ以上なにを他人に自慢することがあるんだろ。

「やだあ、やめてよ気持ち悪い。私、女なんかに興味ないわ」

わたし、そんなんじゃないのに。

「そういえば知ってる？ あの子が公立に通ってるのって、中学受験の時期に精神病院に入って

たからなんだって」

それは内緒にしてって約束したのに、なんでばらしちゃうかなあ。

「あ、ていうか。あの子がいくら頑張っても、私立なんか到底無理だったんだよね」

わたしは。

「あれだけ勉強して、未だに塾内で学力底辺だし」

わたし……。

世界が暗転して、何も考えられなくなって、それでも頭の片隅に、奈緒ちゃんの手があった。

暗闇の中で奈緒ちゃんの手感触を思い出すと、わたしはいくらでも開き直ることができた。

いくらでも大丈夫だと思えた。今まで怖いと思っていたものも、しだいに薄れていく気がした。

教室に戻ると、しばらくして青木先生の英語の授業が始まった。わたしはやはり授業など聞かず、教材のページに描かれた桃太郎の絵を眺めた。

鬼ヶ島から追放されてしまう悲運な鬼たち。彼らはしくじったのだ。鬼ヶ島さえ見つからなければ追い出されることもなかった。自分が鬼であるということを隠さなかったから、こうなったんだ。

わたしなら、もっとうまくやってみせる。

ある日、わたしは中学生になって初めてののずる休みをした。お父さんの部屋に入って、いつものようにお父さんをベッドから起こすお手伝いをしているときに、「実は昨日からお腹の具合が悪いの」と告白した。

お父さんは、それについて深く追求してこなかった。たぶん、生理痛が酷いのだと勘違いして、気を使ってくれたんだと思う。

「朝ご飯はインスタントにするから、もう部屋で寝ていなさい」

お父さんはキッチンの手すりに掴まりながら、私の手も借りずにカップ麺にお湯を注いだ。気が引けたけど、私は黙ってうなずき部屋に戻った。

布団を頭までかぶりながら、わたしはひどい罪悪感に苛まれた。

お父さんの仕事はいつもお昼からで、事故で片足を失くして退院したあとも、ほとんど休むことなく日々働き続けている。一応生活保護も受けているけど、男手一つでわたしとこの大きな家を支えるために、お父さんは頑張っているのだ。わたしが世界一尊敬する人物はお母さんだったけど、お父さんのことも、それに比肩するくらい尊敬している。

わたしは、あのお父さんを騙してしまったんだ。しかもその動機が.....

心の揺らぎを打ち消すように、わたしは転がるように寝返りを打った。

きっと大丈夫だよ。たった一回の過ちくらい、どうってことないじゃん。結局、全てばれずに終われば済む話なんだ。

ふいに部屋の扉がノックされた。わたしは半纏を羽織り、扉を引いた。お父さんはもう車椅子を動かせており、出掛ける準備を済ませていた。

「もういくの？」

「悪いけど、今日はお父さん、夕飯はいらないよ。帰りが遅くなるからね」

私はガッツポーズしたくなるのをこらえた。お父さんの帰りが遅くなるといえば、大抵は深夜十二時をこえてしまう。するとお父さんが財布から五千円札を出して手渡してきた。

「今晚は、好きな店屋物でも頼みなさい」

「こんなにいらないよ。お小遣いだって、この前貰ったばかりだし」わたしはあくまで控えめに拒否した。

「いつも小夜

さよ

にはお世話になっているからな。これはボーナスだよ」

お父さんはにっこり笑った。わたしはそれ以上遠慮せず、お礼を言って受け取った。お父さんには悪いけれど、今はお金が必要なのだ。

お父さんはいつも福祉車を運転して職場に向かう。たまには乗せるの手伝うよ、と言ってみただけど、お父さんは、気にせず早く寝なさい、と首を振った。

お父さんが出掛けたあと、わたしはまず、二階の物置部屋に入った。すぐに目当てのものは見つかった。

有名なスポーツブランドのクーラーボックスだ。小学校でバスケットをやっていたとき、お父さんがプレゼントしてくれたもの。バッグにしてはやけに角張っているけど、黒地のエナメル素材にブランド名が印字されていて、一見ただのスポーツバッグにしか見えない。街中で普通に肩から提げていても、へんに怪しまれることもないだろう。

しかし、出来るだけ派手にならないような格好で外に出た。中学生が平日の昼間から外にいるのはおかしいと思われてしまうからだ。

わたしは電車で出来るだけ遠くに行き、見慣れない駅で降りた。駅前のホームセンターを見つけたので、さっそくそこに入った。

わたしがまず探したのは包丁である。どういう包丁がいいのか分からなかったけれど、とにかく一番重そうなものを選んでみた。刃の幅も厚く、手に沈むような重みがしっくりとくる。商品名は捌き包丁とあったけど、わたしはこういう包丁のことを肉切り包丁と呼ぶのだと思っていた。でも、言葉の響きが野蛮なので、わたしはこれを捌き包丁と呼ぶのに賛成だった。

次に探したのは木の板だ。出来るだけ丈夫な木がいいと思っていたが、どの種類の木材が堅いのか、わたしには知識がなかった。そばにいた店員さんに堅い木はどれかと尋ねてみると、店員さんに、「基本的にこういう店では柔らかい木材しか扱ってないよ」と笑われてしまった。

「すでに加工された樫の木板ならあるけど。ほら、あそこ」

店員さんはあるコーナーを指して言った。店員さんは終始ため口だった。

「お嬢ちゃん、小学生でしょ。おつかいでも頼まれたの？ こればかりはパパやママに手伝ってもらった方がいいと思うけどなあ」

わたしはむっとして、無言で小さく頭を下げて店員さんから離れた。

店員さんが指し示したコーナーに行くと、そこには確かに樫の木板があった。でも思ったより小型で、うちにあるまな板より一回り小さいくらいだった。迷ったけど、そもそもバッグに入る大きさでなくては駄目なので、これでいいやと妥協してカゴに入れた。

そのとき、カゴの中の様子にやっと気づいた。捌き包丁に樫の木板、ゴム手袋や雨ガッパやビニール紐など。ぱっと見、それ目的にしか見えないような禍々しさだ。

買うのは包丁と木板だけでいいや、と諦めることにした。他の道具なら、自宅や近所のお店でも済ませられるだろう。

ゴム手袋やビニール紐はやっぱり家にも置いてあった。ゴム手袋は未使用だし、ビニール紐も、適当な長さに切り分けて持って行けばいい。

ただし、雨ガッパだけは不便そうだった。お父さんが昔使っていた、薄い透明のカッパしかなかったのだ。着てみたけどちょっとブカブカで、あまり素材も丈夫そうには見えない。しかし、さっき買った樫の木板がやけに高額だったので、もうこれ以上お小遣いをはたきたくなかった。別に着たまま長い距離を歩くわけでもないし、ブカブカのままでいいや、と思うことにした。

もう一度家を出る。スーパーに立ち寄り、冷凍食品を何回かに分けて購入して、固形のドライアイスはその都度もらった。固形ドライアイスは素手で触れると火傷すると聞いたことがあるので、一つにまとめるようなことはせず、袋で小分けにされたままクーラーバッグに入れた。

スーパーにはファーストフードコーナーがあったので、そこでハンバーガーを食べた。悪い事をしている気分になったけど、これからすることに比べれば全然大したことないな、とおかしくなってしまった。

集めた道具を全てクーラーバッグに入れて、帰りがけに駅のロッカーに預けた。

家に帰り、部屋に入ると、わたしは疲れで一気に眠くなってしまった。ベッドで横になり、携帯の電池カバーを開けて裏返す。そこには、奈緒ちゃんと撮ったプリクラが貼られていた。

携帯を枕元に置いて、電池カバーを両手で包む。奈緒ちゃんの描くピースサインを延々と眺めていたら、いつのまにか寝てしまった。

目を開ける。窓から夕日が射し、わたしの部屋をオレンジ色に染めていた。わたしは電池カバーを胸に抱いたまましばらくぼうっとしていたけど、ちらりと流し見た壁時計にはっとして、勢いよくベッドから跳ね起きた。

もう塾の授業が始まっている時間だ。今日はずるしたから塾もお休みしたけど、わたしには他にやることがあるんだった。

朝方に着替えた地味な服装のまま、わたしは家を飛び出した。

駅のロッカーを開け、クーラーバックを出して肩にかける。重かったけど、全速力である場所へと走った。

奈緒ちゃんはいつも塾から自宅まで歩いて帰る。一度奈緒ちゃんの家へ遊びに行ったとき、彼女がある裏道を教えてくれた。ちょっと危ない裏道である。

わたしは商店街を訪れた。背の低いビルと文房具屋さんに挟まれた小道を通ると、そこにはひっそりとしたスナックや民家が建ち並んでいる。民家といっても、そこら一帯はほぼ空き家となっているようだ。スナックは十一時から営業と玄関に書いてあるけど、そもそも営業しているかすら怪しいほどの廃れ具合だった。その路地の突き当たりを右に曲がり、奈緒ちゃんの教えてくれた穴場スポットの裏道へと入る。

右手にはビルの背中があった。灰色の壁はすすけていて、触ると汚れてしまうので気をつけて歩いた。左には錆びたフェンスが続いており、道に合わせて十メートルくらい伸びている。フェンスから見下ろすと、すぐ斜め下には廃墟の一軒家がそびえていた。大邸宅とっていいほどの家だったが、朽ち果て、全体的に茶を帯びていて、見るも無惨な様相だった。

フェンスがなくなる。そこには、廃墟の門へと続く下り階段があった。四十段くらいはありそうな、長くて古い石の階段。廃墟の門は南京錠で施錠されているけど、この階段だけでも邸宅の名残りを感ずることができる。

この裏道をさらに進んで右に曲がると、また普通の街道に出られる。奈緒ちゃんをよく、塾の帰りにここへ寄り道に来るそうだ。一度だけ、奈緒ちゃんにここに連れてきてもらったことがあ

った。

『今までこの場所で他の人と出会ったことはないし、私にとっては秘密基地みたいなものなの』

この階段で奈緒ちゃんと一緒に腰掛けていると、奈緒ちゃんがそう言った。

『勉強やお稽古で疲れると、毎回、ここに癒されに来るのよ。いわば私の聖地ね。実はこの場所を紹介したのって、小夜ちゃんが初めてなの』

あのときの奈緒ちゃんも、照れ臭そうに笑っていた。わたしはうれしさのあまり奈緒ちゃんに抱きついて、奈緒ちゃんもわたしのことを抱き返してくれた。

わたしはそのときのことを深く反芻しながら息をととのえた。階段に腰を降ろし、クーラーバッグをかたわらに置く。そこはビルからのボイラー音に包まれ、あたりの空気を轟々と揺すっていた。

すっかり日は沈み、廃墟は暗黒に満ちている。和洋折衷をあしらった変わった邸宅で、ずっと眺めていると心が不安定になってしまいそうなアンバランスさだった。

ふいに、割れた窓の奥で何かがうごめく。わたしは目を凝らした。うごめく何かは、たしかにこちらを見ていた。

赤い眼だった。血走ったような、屍肉を欲する粗暴な眼。鬼だ、とわたしは判断した。普通に考えれば犬か猫だろう。でもわたしには、あれが鬼だという確信があった。

鬼は赤い両眼をしばたき、黒い影をうごめかせた。しきりに、わたしの方を見つめていた。

わたしは優越感に浸った。あの鬼は、自分を表に出せないのだ。わたしのように上手く鬼の姿を隠せないから、ああやって廃墟の家に身をひそめている。鬼はわたしのことを羨んでいる。だって、わたしがこれからする行為は、きっと周りの人間たちにばれることはないのだから。

ポケットに手を入れ、携帯の電池カバーを確かめる。一辺一辺を指でなぞり、最後にカバーの裏に触れた。そこに貼られた奈緒ちゃんとのプリクラの感触をうっすらと感じ取る。

自然と口元がほころんだ。

わたしはいま、奈緒ちゃんの手とつながっている。

「小夜ちゃん？」

ゆるんだ頬を固くして顔を上げる。

学生鞆を両手に抱えながら、奈緒ちゃんが小首を傾げた。

奈緒ちゃんは喜色満面といった笑みでわたしの隣に座った。

「どうしたの？ 今日風邪でお休みじゃなかったっけ」

その表情と声に悪意は感じられない。わたしも奈緒ちゃんと似たような笑顔を作って、黙って首を振ってみせた。

「じゃあ、もう風邪治ったとか？ あ、それともずる休みでしょ」

奈緒ちゃんがいたずらっぽく笑ってわたしの頬をつついた。奈緒ちゃんの人差し指の先っぽが、わたしの頬骨のすぐ下に沈む。背筋がぞくりとして、恍惚の息が漏れそうになる。

何をにやにやしてるのよ、と言われたけど、わたしはもう、頬の緩みを我慢できそうになかった。奈緒ちゃんは何も言わないわたしを不審そうに見たけど、やがてあのクーラーバッグへと注意を向けた。

「その荷物はなに？ やけに重たそうだけど」

「なんでもないよ。気にしないで」

答えてみると、奈緒ちゃんは安堵したように話の方向性を変えた。内容は、今日の学校で起きたお笑い話だった。最初からバッグなど気にしていなかったようだ。

わたしは愛想よくうなずきながら奈緒ちゃんの話聞いた。本当は話なんて頭に入ってこなくて、耳の穴がちくわみたいになっていたけど、でも、奈緒ちゃんがいつも通りだってことだけは分かった。

あの日、塾の女子トイレ内でわたしの陰口を触れ回った奈緒ちゃんは、もういない。

彼女の気持ちはよく分かる。わたしだって、それくらいの分別はつく。女の子の付き合いってそういうものだもん。奈緒ちゃんは悪気があってわたしの陰口を言い触らしたわけじゃない。ただ、女の子同士で一番盛り上がる話って、結局、誰かの悪口だもんね。奈緒ちゃんも必死なんだ。他の子たちの輪に入ることに。

だからこそ、わたしは奈緒ちゃんに失望していた。

奈緒ちゃんがあんなに俗っぽい女の子だったなんて、わたしは信じたくなかった。

奈緒ちゃんもっと気高く高貴でなければ駄目だと思っていた。常にわたしの上を歩かなければいけない。生涯わたしの手の届かない存在でなければいけない。庶民的で浅はかな一面など、わたしは見たくなかった。

「そこで三村先生が、くるくる、ぱって――」

わたしは気づいてしまった。今この瞬間の奈緒ちゃんだって、実はわたしの望む奈緒ちゃんじゃなかったんだ。

奈緒ちゃんは、わたしみたいな凡人と関わってはいけなかったのだ。理想はいつだって手の届かない場所に置かなくてはいけない。わたしはテレビ越しの奈緒ちゃんが好きだった。あの手と演奏にずっと夢を見ていたかった。そして奈緒ちゃんは、わたしのことなんか一生知らずにいてくればよかったんだ。結局、憧れは憧れのままだが一番よかったのに。

それなのに、わたしは一体何をしているの？ それでこの子は、あのときなんて言ったっけ。

——私たち、親友でしょ。

わたしの奈緒ちゃんはそんなこと言わない。本当はわたし、奈緒ちゃんと友達になんてなりたくなかった。

奈緒ちゃんと出会ってしまった時点で、わたしの中の奈緒ちゃんは終わっていたのだ。

「大丈夫？ やっぱりまだ具合悪い？」

わたしは力なく首を振った。

「大丈夫。でも、ちょっとめまいがするかも」

「じゃあもう帰ろうよ。ごめんね、長話聞いてもらって。家まで送ってあげる」

奈緒ちゃんがわたしの手を取って立ち上がらせた。わたしは、奈緒ちゃんのこの優しさが大っ嫌いだ。彼女の手を掴み、膝を伸ばす。本当に立ちくらみがしてきた。全身の筋肉がところてんになったみたいだ。

わたしの目に映るのは、懸命にわたしを引こうとする奈緒ちゃんの手だった。壊してしまいたいくらい愛おしい、奈緒ちゃんの手。

わたしに残っているのは、これだけなんだ。

突如、奈緒ちゃんが裂くような悲鳴を上げた。

気づけばわたしは、彼女の手を噛みついていて、ちょうど親指の付け根あたり。わたしの前歯が深く突き立つ。

悲鳴を上げたまま、奈緒ちゃんは右手をがむしゃらに振った。わたしは全力でその手を抑え付け、徐々に顎の力を込めていく。

「誰かっ……！」

奈緒ちゃんは相変わらず弱々しく叫び続けたけど、彼女を助けてくれる者はいつまで経っても現れない。ビルからのボイラー音で何もかもが遮られているのかもしれない。その間にもわたしの歯は食い込み、骨に当たる固い感触にまで到達した。

ここで、お腹に刺さるような衝撃が走る。奈緒ちゃんの膝がわたしの鳩尾を捉えたのだ。

二人の距離が引き離される。奈緒ちゃんは後方のフェンスの角に背中からぶつかり、大きく呼吸を吐き出した。わたしは地面へとたたかき尻もちをつく。

直後、べとりという音がして、階段に何かが落下した。自分でも恐くなるくらいの瞬発力で即座にそれを拾い上げる。人差し指と親指でぶら下げ、商店街から漏れるかすかな灯りに照らした。

やはりそれは、奈緒ちゃんの親指の肉片だった。わたしの指の間で、濃紅の新鮮なお肉が垂れ下がる。肉の外側で、薄い表皮が白く照り輝く。

お肉を唇でくわえ込んでみる。お婆ちゃんが蜜柑の汁を吸うみたいにほっぺたをへこませて、一気にお肉の血をすすった。どれだけ吸ってみてもあまり血は出てこなかったが、舌の上を微量に潤せるだけで満足だった。舌先で転がして酸味を楽しみ、それから奥歯でよく噛みしめる。三回ほど味が変わったけど、どの味も甘酸っぱくておいしかった。

次に、お肉を皮から剥がして口に入れる。同じように味わっていき、慈しむように咀嚼する。頭の中で閃光みたいなものが煌めいた。続けざまに皮を食べる。こちらも慌てないよう、ゆっく

りと噛んでいった。

奈緒ちゃんの味は甘くて濃厚で、さっきから頭の中で音楽がエンドレスして止まらない。耳に覚えのある旋律だった。奈緒ちゃんの演奏だ。たぶん、これは序奏のパート。

すごい、と純粹に思った。奈緒ちゃんはピアノだけではなく、自分のお肉でだって演奏することが出来るのだ。

肉片を全て食べ終えたころ、近くから嗚咽が漏れ聞こえてきた。

見ると、奈緒ちゃんがフェンスにしがみつき、その場でへたり込んでいた。親指の付け根から流れ出す血液がフェンスの棒を滴り落ちていく。奈緒ちゃんはおしっこを漏らしていて、地面がべちゃべちゃになっていた。その泣き顔を静謐として眺める。わたしが記憶していたほど、奈緒ちゃんは大してかわいい顔ではなかった。

「あなた、おかしいわ……」

しかしわたしは、わたしが肉片を食べ終わるまで逃げなかった彼女に感謝した。わたしは奈緒ちゃんの両肩を掴み、一気に起きあがらせた。脳みその籠が外れたのか、それとも奈緒ちゃんのお肉に絶大な栄養素が含まれていたのか、それは定かではないがとにかく、今のわたしの全身はありったけの力で満ちあふれていた。

奈緒ちゃんがもう一度叫ぶ。その瞬間、わたしは彼女を横倒しに放り出した。

奈緒ちゃんが石の階段を転げ落ちていく。頭と背中を交互に石段に打ちつけ、何度も回転して落ちていった。

一瞬、黙ってこれを見届けてあげようと思ったが、わたしはすぐにあることに気づいた。慌ててクーラーバッグを掴み、階段を駆け下りて奈緒ちゃんを追いかけた。

なんてばかなことを。あんな殺し方じゃ、奈緒ちゃんの手が傷ついちゃうかもしれない。

奈緒ちゃんが邸宅の門にぶつかった。がしゃんという激しい音を立て、身体が横向きに跳ねる。そこで、わたしは降りる速度をゆるめた。

ゆっくりと下っていき、地面で仰向けに伏せる奈緒ちゃんを眺望した。

頭を切ったのか、彼女は激しく流血しており、顔はほとんど赤色で染まっていた。しばし、震えながら頭を持ち上げる。やがて事切れたように、静かに後頭部を地面へと着けた。

たぶん、もう死んだよね。

階段を下りきる。石畳のでこぼこを靴の裏で感じる。一度、前方の錆びきった鉄格子の門を見据えて、それから奈緒ちゃんを見下ろす。わたしは立ったまま、彼女の両手をよく観察した。

ああ、よかった。大丈夫そう。右手も左手も、特に目立った怪我はしていない。

心臓が急激に早鐘を打った。初めて殺人を犯したことによる狼狽か、それとも、これから彼女の手を完全に支配できることに興奮を覚えたためなのか、それはよく分からない。

とにかく、これからすべきことを必死に脳内で整理した。

クーラーバッグを肩から降ろし、チャックを開け、ビニール紐を取り出す。奈緒ちゃんの肩と腕の付け根に、しっかりと巻きつけた。出来るだけ血が飛び散らないための配慮だけど、素人のわたしがこんなことをしても大して意味はないのかもしれない。しかし、やらないよりはマシだと判断し、もう片方の腕にも同じように強く紐を巻いた。

バッグから雨ガッパを出す。おぼつかない手つきながら、なんとかわたしの腕は通った。前ボタンを全て止める。やっぱりブカブカだけど、なんとか作業は出来そう。

櫛の木板と捌き包丁をバッグから出した。

もうゴム手袋を着けることすらもどかしくて、わたしは素手のまま作業を始めることにした。奈緒ちゃんの左手を持ち上げ、その下に木板を敷く。上腕の肘近くを中心に置けるよう、速やかに板の位置を調整した。

わたしは手探りに捌き包丁を探した。しかし、一向に包丁の感触が来ない。いよいよわたしは地面に目を落とす。よく見れば、ここの石畳はところどころ草が伸びきっていた。バッグから包丁を出したあと、わたしはそれを無意識のうちに雑草の中へと放り投げたらしかった。

鼓動がさらに高鳴る。わたしは死にもの狂いで包丁を探した。それは間もなくして見つかったが、わたしはそれでも、かなり急いでいた。捌き包丁を手に立ち上がり、奈緒ちゃんのもとへと歩み寄る。

そこで雨ガッパの裾に足をかけ、わたしは大きく転倒してしまった。その勢いで、奈緒ちゃんのお腹の上に頭から倒れ込む。それによって彼女の傷ついた内臓がさらに圧迫されたのか、奈緒ちゃんはかすかに痙攣し、少量ほど吐血した。

わたしは体育座りになって雨ガッパの裾を確認する。足を引っかけた分だけ、少し破れていた。しかし、足下がちょっと破れたくらいではさして問題はないだろうと即決する。

半立ちになり、捌き包丁を両手で握った。頭上で思い切り振りあげ、奈緒ちゃんの上腕へと狙いを定めて叩き落とす。鈍い音が辺りに響き、手がじんと痺れた。腕をしばってもやっぱり血の飛沫は上がり、数滴ほど雨ガッパに染み付く。

刃の落ちた場所は狙い通り肘の間接あたりだったが、半分ほど食い込んだだけで止まってしまった。一発で切断できるものと思っていたのに、予想以上に骨が固い。

しかも、刃を引き抜こうとしても腕がぶらりと付いてきて、なかなか離れない。焦りで無茶苦茶に包丁の柄を動かしたが、それでも抜けなかった。

額を前髪ごと拭う。手の甲がべったりと汗で濡れた。深呼吸を二回して、刺さったままの上腕を木板に乗せなおす。

もう一回だけ、深呼吸。

包丁の柄を握ったまま、刃の背中を思いっきり踏みつけた。だん、という断絶音がして、肘から先の部分が奈緒ちゃんから独立する。

深い息吹をし、わたしは冷静に奈緒ちゃんの左腕を拾い上げる。クーラーバッグに入れて、いくつかのドライアイスの小袋で、丁寧に腕を包み囲んだ。

こつこつと積み上げるように、わたしの思考が冷めていく。春の湿った空気が頬の産毛をなでる。捌き包丁は、先端から木板に突き立ったまま。

作業を一時中断し、廃墟邸宅の門へと目を向ける。

門の鉄格子に両手をかけ、こちらをしげしげと覗き見るものが居た。あの卑しい鬼だった。黒く大きな図体を揺らし、獣のような息を吐きながら、鬼は物欲しげに奈緒ちゃんを見下ろしていた。わたしはそいつの、ぎらぎらと光る赤い眼をにらみつける。

赤い眼がこちらを見つめ返す。それを見下すように、わたしは口元で笑みをたたえた。
「一生、そこで指をくわえて見ているといいよ」
わたしは嘲笑混じりに言つけた。

四話

右腕の切断は左腕以上にスムーズに済んだけど、わたしはその切断口の荒さが気になった。でも、ぶっちゃけて言えば、手首から先の部分さえ無事ならそれでいいので、わたしは最低限の収穫で我慢することにした。

女の子の腕二本でもクーラーバッグの容量をかなり占めてしまう。他の部位も切り落とせるものならそうしたかったが、わたしにこれ以上の時間が残されているとは考えにくかった。

幸い、顔に血は飛び散ってこなかったようだ。しかし問題は両手だった。ここまでゴム手袋をつけずに素手で解体作業をしたため、カップから露出した両手部分が奈緒ちゃんの血で染まりきっていた。あらかじめ持参した500mlのペットボトル水で洗ってみたけど、完全に落とすことも出来ずに使い切ってしまった。

奈緒ちゃんの両腕はクーラーバッグの底に眠っている。その上からドライアイスの小袋を敷きつめ、隠すようにしていた。

濡れた手を足元の雑草で拭き、カップを脱ぎ捨ててバッグの中に入れた。包丁でビニール紐を切って回収し、わたしが持ってきた道具は全てバッグの中に入れる。本当はもっと良い状態で奈緒ちゃんの腕を持ち出したかったけど、こればかりは仕方がない。

鬼は、もうとっくに気配を消していた。

忘れ物がないか今一度確認したあと、両腕を失った哀れな奈緒ちゃんを流し見る。月明かりが妙に照り輝く空の下、今の奈緒ちゃんをどんなに眺めても、わたしにはこれといった感想も浮かばない。

バッグを肩にかけなおし、わたしは石の階段を駆け上がった。

裏道を出る寸前、この赤黒く汚れた両手をどうしようかとひどく悩んだが、紺のセーターの袖をうんと伸ばし、指の先まで隠して事なきを得た。

商店街の人通りは限りなく少なかった。

場所が場所だけに、奈緒ちゃんの死体はしばらく発見されないだろう。たぶん、腐臭がしてくるまで気づかれないんじゃないかな。

この近所に、真白ヶ丘名物の森林公園があることを思い出した。ちょうど自宅へと続く経路の途中にある。ひとまずそこに立ち寄って手を洗っておこうと思った。

百メートルも歩かないうちに公園に到着する。

真白ヶ丘森林公園は県内一広い公園らしくて、わたしの通っていた小学校の遠足コースも毎回ここが選ばれていた。以前お父さんが「東京ドームが四十個くらい入るんじゃないかなあ」と言っていたけど、そもそもわたしは東京ドームに行ったことがないのであまり実感が沸かなかった。

ここからだ『やすらぎ広場』が近いけど、そこは夜になるとホームレスが集まって危険だと日頃から言いつけられているので、バードウォッチングコースを歩いて『多目的広場』に入った。

手洗い場で両手を洗っていると、わたしはまた立ちくらみに襲われてしまった。本当に風邪を引いてしまったのかもしれない。そばに屋根付きのベンチがあったので、そこで少し休んでいくことにした。

ベンチの下にクーラーバッグを置く。頭がぴりぴりと麻痺したようになって、様々な思いが浮かんで消えた。口の中が唾液で満ちている。奈緒ちゃんの味がまだ舌の奥に潜んでいて、わたしは気味の悪い笑みをしながら口内の感覚に神経を集中させた。

物音一つしない夜の公園。わたし以外にこの公園に人は居ないのではないかというほどに辺りは静寂に落ちていた。

携帯を開いて時刻を確認する。夜の十時半。お父さんもまだまだ家には戻ってこない。

両膝に手をつき、深く息を吐く。胸のドキドキは相変わらずだった。わたしは、その正体に薄々気づき始めている。

今、わたしの真下にあるバッグが原因だ。わたしの憧れの全てが、いつでも手の届く範囲にある。今すぐ取り出して、撫で回したり頬ずりしたりしてみたかった。でも、万が一ということもある。これを人に見られればわたしの人生は終わってしまう。牢屋になんか絶対入りたくない。

そういえば、このバッグの中身、どうやって処理しよう。今日使った道具はどうとでもなるかもしれない。でも、奈緒ちゃんの手はどこに隠し持てばいいのか……。

そうだ、あそこがいい。わたしはある最適な保管場所を思いついた。あとは、その場所へどうやって持って行けばいいかを考えるだけ。

がさり、と背後で芝生を踏む音がした。全身が硬直したようになり、わたしは反射的に振り返る。

女の人が立っていた。いや、近所の高校の制服を着ていたから、高校生の女の子だろう。

夜空の満月をバックに、女子高生はぎこちのない笑みでわたしを見下ろしていた。

「あー、こんばんは。えっと、小学生かな」

わたしはすぐに首を振る。必死に平静に取り繕って答えた。

「ちゅ、中三です」

「どうしたの、こんな時間に。迷子？」

どう答えるべきか分からなくて、わたしはかなり曖昧にうなずいてしまった。女子高生は「ふうん」と、どうでも良さそうな相づちして、わたしのそばに近寄った。

女子高生が隣に座る。

足を組み、太ももの上に肘を置いて頬杖をついた。わたしの目は自然と彼女の足に行く。

長くて細い足。高校生って、やっぱりスカート短いなあ。足組みしてるから、余計にきわどく見えちゃいそう。胸もちゃんと膨らんでいて色っぽい。あと一年でこの人たちの仲間入りするんだと思うと、わたしは尻込みしてしまった。年齢はそれほど変わらないはずなのに、わたし

と違ってこの人は大人みたいに見える。

「きみ、名前は？」

女子高生の唇がうごめく。その顔を見つめた。目力がすごくて、見られただけで石像にされてしまいそう。緩められた口元は妖艶という単語がぴったり。髪はサイドテール風に肩の辺りで結わえられており、片胸の前でさらりと下げられている。美人とかawaiiの中間のような人。

女子高生が小さく首を傾げた。

「あの、名前は」

我に返る。彼女の顔をまじまじと観察していたことを恥ずかしく思った。冷静になってみると、どこを見ても目のやり場に困るくらい魅力的な人だった。わたしは頬に熱を感じながら視線を逸らす。

「あ、こっちから名乗るのが先か。あたしは日野咲子」

「.....三崎小夜です」

「大丈夫？ 顔、すごい赤いけど」

大丈夫です、とわたしはつぶやく。

「家はどこ？ なんならあたしが一緒に探してあげるけど」

「いえ、あの。やっぱりわたし、迷子なんかじゃなくて、」

「そうだ。これあげる」

唐突に缶コーヒーが手元に来る。わたしはおずおずとそれを受け取った。彼女はやはり口元だけで笑っていた。

「ありがとうございます、日野さん」

「咲子でいいよ」

「えと、咲子さん」

咲子さんはきょとんとして、くつくつと笑い出した。よく分からない反応だった。わたし、なにか変なこと言ったかな。

咲子さんは急に黙り込み、頬杖をついたままわたしの横顔を眺めた。鋭い目つきで見られるとかなり居心地が悪くて、わたしはそわそわしながらコーヒーの口を開けた。少し飲む。

あまりの苦さに思わず顔をしかめてしまった。なにこれ、無糖なのかな。

「ごめんね。ジュースのボタン押したはずなのに、何故かそれが出てきちゃって」

「いえ、いいんです」

誤魔化すようにもう一度飲む。舌がコーヒーを拒絶しているかのようなようだった。ためらいがちに流し見ると、咲子さんと目が合う。

「そういえばさっき、本当は迷子じゃないって言ったよね」

額に汗がにじんでくる。わたしがいい加減なことを言ったから、咲子さんを怒らせてしまったのだろうか。彼女はシニカルな笑みをたたえたままで、なんだか怖かった。

「ごめんなさい.....」

最初は迷子かと訊かれてうなずいてしまったけれど、よくよく考えたら、迷子だと思われたら最悪、警察に連れられて保護されてしまうかもしれない。わたしにとって、それはかなり不都合

なことだ。

「謝らなくていいよ。それより、ねえ知ってる？」

咲子さんがまたも話題を変えた。

「この近所でさ、なーんか物騒な事件が起きたらしいよ。詳しいことまでは知らないけど、結構な人だかりが出来てた」

「そうですか」

素っ気ない返答をしながらも、内心、わたしは動揺していた。奈緒ちゃんの死体、もう見つけれられたの？

「そう。まだ犯人がその辺うろついてるかもしれないからさ、早く家に帰った方がいいよ」

黙って忠告を受け取りながら、わたしはベンチの真下に置いたクーラーバッグを気にした。どうしよう、もし咲子さんにこのバッグのことを聞かれたら。

「どうしたの、黙り込んで」

「あ、いえ」

「あー。もしかして、あたしが犯人だと思ってんでしょ？」

咲子さんが仰々しく笑った。

「柄悪いとかよく言われるけどさ、これでも結構良い人だからね、あたし」

「いえ、わたしはそんなこと、」

「もう。ひどいなあ、小夜ちゃんは」

わたしはため息を吐きそうになった。なんかこの人、肌に合わない。身体が拒絶反応を起こしてしまう。

「飴とか食べる？」

咲子さんがポケットからカン口飴を取り出しながら言う。遠慮して首を振ると、彼女は飴を仕舞いながら気難しそうに小さくうなった。

「迷子じゃなかったら散歩とか？」

めまぐるしく話題をすり替えられる。このわざとらしさが鼻について仕方がない。頭の中を掻き回されてるみたいだ。

「……散歩です」

「そっか。だから手ぶらなんだ」

その言葉を聞き流しそうになる。頭の中で繰り返し、その意味をよく考えてみた。わたしは何気ない風を装って相づちし、心の中でほくそ笑む。

そっか。このバッグのこと、咲子さんは気づいていないんだ。それなら、もう下手に怖じけることはない。いくらでもあしらいようがある。

「わたし、そろそろ失礼します。咲子さんの言うとおりに、今夜は物騒みたいなので」

「そう？　じゃあ送っていくよ」

咲子さんは、わたしがベンチを立つのに追従した。わたしは拒否しなかった。途中まで一緒に来てもらって、彼女と別れたあと、一人で戻ってバッグを回収しにできればいいと考えた。

咲子さんと共に多目的広場を出る。それとなく後方のベンチを見た。大丈夫、深夜のこの場

所に、人なんて滅多に来ないんだから。

「どこに住んでるの？」

「この公園から結構近いです」

「へえ。もしかしたら近所かもね、あたしら」

何も言わず、愛想のいい笑みを返しておく。咲子さんはずっと、場慣れしていないような不自然な笑顔だった。人見知りするタイプなのだろうか。じゃあ、どうしてわたしなんかに声をかけたんだろう。

公園を出る。

咲子さんがあるマンションを指した。

「あそこがあたしんち。最上階の角部屋だから落ち着くし、景色も最高なんだよね」

心底どうでもよかった。

「じゃあ、この辺まで結構なので」

咲さんが首を振る。

「いいよ、最後まで送ってあげる」

わたしはまたも心中で舌打ちした。

住宅地帯に入る。咲さんが物珍しそうにあたりを見回した。わたしの家はいちおう、高級住宅街の一角にある。お母さんが残した生前の功績と、障害者ながらも頑張ってお父さんのおかげだ。わたしは所詮、お母さんとお父さんにおんぶに抱っこされるだけの存在でしかない。それでも、わたしは素直に両親を誇らしく思っていた。

洋風の一軒家が見えてくる。わたしの家だ。明かりはついておらず、まだお父さんは帰ってきていなのだと分かった。でも、出来るだけ急いだ方がいい。

「へー、おっきい家だね」

わたしはそれに対して特に返答せず、丁寧に頭を下げた。

「送ってくれて、ありがとうございます」

「いいよ。あたし自身の防犯にもなったしね」

とは言いつつも、咲さんの口調にはこれといった感慨もない。ひらひらと手を振っただけで来た道を戻りはじめた。結局何がしたかったのか本気で分からなかったけど、わたしは黙ってそれを見届ける。

彼女の姿が見えなくなってから公園に戻ろう。スタートダッシュ直前で腰を屈めて待つ陸上選手の気分を味わう。

咲さんが歩きながら携帯を取り出した。誰かと通話しているようだったが、そのせいで彼女の歩みは著しくゆるんだ。わたしは苛つきながら彼女の背中を凝視する。

曲がり角付近で、ふいに咲さんがこちらを振り返った。わたしはとっさに柔らかな笑みをつくり、手を振った。

咲さんは無表情で、軽く手を上げただけで角の先に消えていった。わたしは走る。

走り出した瞬間、焦燥感が一気に高まっていった。あのバッグは誰にも拾われなかったらどうか。大丈夫なはずなのに、それだけが心配でならなかった。

曲がり角に来ると、壁から少しだけ顔を出してみる。そこから続く道の先に、彼女の姿は見られない。安堵し、わたしは改めて駆け出した。

わたしは夢でも見ているのだろうか。

広場のベンチから、クーラバッグが消失していた。しばし呆然と立ち尽くす。虚ろな足取りでベンチに歩み寄っていく。腰を屈めてベンチの下を覗き込んだ。あるはずのものが、忽然と姿を消していた。

ふらつきながら周辺を見回した。夢遊病者のように近辺を探し歩き、茂みの奥や公衆トイレなどを調べた。

刻々と時間が過ぎていく。気づけばわたしは、あのベンチに座り込んでいた。

本当は、奈緒ちゃんの腕なんて奪い取っていなかった。そう一人ごちることが出来ればどんなに楽だろう。

だけど、これは明らかに誰かの手によって作為的に持ち去られたのだ。誰かの手によって。誰が？ 誰がこんなひどいことを。

噛んだ奥歯がきしむ。拳が震えた。わたしはベンチの板を睨み、力まかせに叩きつける。

あの女だ！

わたしを手ぶらだと勘違いしたあの素振り、あれは嘘だったんだ。あいつは最初から、バッグの存在に気づいていた。

こうして仕組まれて初めて気づく。あの女は、わたしを事件の犯人だと疑っていたに違いない。被害者の奈緒ちゃんが中学生だということを何らかの方法で知り、偶然にも深夜の公園に一人で居た、同じく中学生のわたしを不審に思った。なにか関連があるのではないかと疑い、やがてあいつは確信する。そしてわたしを嵌め、出し抜いたのだ。あのへんてこな作り笑いにも納得がいく。

すると、あのバッグの中身はどうなる？ 普通の人なら真っ先に警察に届けてしまうだろう。でも、あの意地悪そうな女のことだ。切断された腕を気味悪がって、放り投げたり踏みつけたりするかもしれない。その上で警察に見せたときに、『途中で落っことしてしまいました』とでも言い訳すればいいと思ってるんだ。なんて浅はかなやつ。そのままあいつが容疑者にされちゃえばいいんだ。

でも、やっぱり駄目だ。奈緒ちゃんの手は取り戻さなくてはいけない。わたしは急いで公園を出た。

あの女は一つだけ失敗を犯した。自宅をわたしに教えてしまったのだ。

あいつが住んでいるというマンションに到着し、天を仰ぐ。かなり背の高いマンションで、少し首が痛くなった。彼女は、最上階の角部屋に住んでいると言った。あの女ならば、興味本位で一度バッグの中身を改めるだろう。そうなれば、まず向かう先は安全な自分の家だと推測できる。

殺意がふつふつと沸き上がる。今すぐあの女を絞め殺して、奈緒ちゃんを取り返してやりたい

。

そのとき、ポケットの中で携帯が鳴った。お父さんからのメールだった。

『あと二十分くらいで帰るよ。それとも、もう寝てるかな？』

わたしは逡巡する。ディスプレイに表示される文字と、マンションのてっぺんとを交互に見つめた。

咲子は携帯を取り出し、吉村の番号にかけた。彼に証拠品とおぼしきバッグの居所を教え、電話を切る。

振り返ると、道の先から三崎小夜の視線を感じた。小夜は獣のように血走った目でこちらを見ていたが、咲子が振り返ったと分かると、すぐに柔らかい笑みを作って手を振った。

携帯をポケットに入れながら、咲子は小さく手をあげた。

やっと家に帰ってこれた。兄はもう寝静まっているようで、生活音は一切聞こえてこない。咲子は自室に入る。小物入れから出したペコちゃんの飴をくわえながら、ベッドに寝転がって天井を見上げる。

やがて吉村から着信が来た。うんざりしつつも咲子は携帯を引ったくる。

『よくやった咲子さん。明日、ご飯でもおごるよ』

吉村は興奮したように言った。

『ぱっと見、普通のスポーツバッグにしか見えなかったけどね、開けてみたらびっくり』

「なにが入ってた？」

『雨合羽にごっつい包丁、ビニール紐の残骸に木の板とか、色々。オール血痕付き』

「そりゃ、もろだね」

『極めつきは、バッグの底で大切そうにドライアイスで包まれていたものだよ』

「なにさ」

吉村はもったいぶるように間を置き、腕だ、と言った。

『女性か子供のものらしき腕が左右一セット。どちらも肘から切り落とされてる』

キャンディの先が歯と歯茎の間をつついた。細くなった先端を噛み砕きながら、咲子は押し黙る。

『腕だけ持ち帰ろうなんて、おかしい話だと思わない？ 普通、バラバラ殺人って、大抵は怨恨か証拠隠滅じゃない。どちらにしても中途半端だ』

「そういう性癖だったんじゃないの？ 腕フェチみたいなの。あたしにはよく分かんないけどね」

世の中変態ばかりだ、と咲子は辟易する。当の吉村も大概に変質者である。

『ただの腕フェチならまだかわいい』

吉村が意味深に示唆した。

『右手の親指の付け根あたり、肉を噛み千切られた跡があるんだ。小さな歯形だよ。これ、どういうことだろう』

「取っ組み合いでもして、思わず噛みついちゃったんじゃないの？」

『だったらいいんだけどね』

検討なんかとっくについてるくせに、と気怠い頭で倦む。ここから先は全て吉村に任せてもいいところだったが、至少くらい興味のある振りをしておかなければ彼の機嫌を損ねてしまいそうだ。

「で、どうするの。そのきしょいバッグ」

『もちろん、これをネタに犯人と接触するよ。えっと、なんて子だっけ』

「三崎小夜」

『小夜ちゃんね』

これから起きることを想像してみる。咲子の口からはため息が止まらなかった。いつまでこの男の道楽に付き合わなければいけないのか。

「とりあえず、明日はマックでいっすよ。シェイク三本頼むからよろしく」

『ちゃんと奢るからご心配なく。そのあと僕の家集合ね。咲子さんにもバッグの中見せてあげる』

「ご遠慮します」咲子はきっぱりと断った。「そんなもの見たら今後の飯がまずくなる」

『大丈夫だって、これくらい』

自分の感覚を押しつけないでほしい。咲子はもう一つの理由を述べた。

「あとさ、そろそろ吉村くんのところ危険だと思うよ。そのうち、小夜ちゃんがあんたのところ来るかもしれない」

『なんで？』

「一つだけ、あの子に嘘ついたんだよね。あたしが住んでるっつって、吉村くんのマンション教えた」

吉村が絶句した。いい気味だ、と咲子はせせら笑う。

『やってくれるね、咲子さん』

悔しそうに漏らす彼の声は、しかしどこか楽しげに聞こえた。



翌日、放課後になると、咲子は真っ先に教室を出た。

奢ってもらおうと約束したものの、本心ではそれをすっぽかして速攻で帰ってやろうと思っていた。これ以上面倒事に巻き込まれたくないし、第一、こんなことにかまけていたら八時からのドラマに間に合わなくなってしまう。そのドラマは、咲子が愛読していた小説が原作となっており、主演もお気に入りの俳優だったので、もし見逃したら死んでも死にきれない。

校門を出て、すぐに腕を掴まれた。冷や汗をかきながらその主を見返す。『ぎりぎりで美男子』と咲子の中で称される絶妙なラインの男が、怖いくらいにこやかな笑みで立っていた。吉村浩介だ。

「待ちくたびれたよ、咲子さん」

いつからここに居たんだろう。しかも待ちくたびれたって、こっちがどれだけ必死こいて学校飛び出したと思ってるんだ。吉村は持ち前の細目をさらに細かくし、握力を一段と強めて咲子の腕を引いた。

「さて、早速行きますか」

「あー、やっぱあたし帰っていいかなあ。今日さ、新番組のドラマが始まるんだよね」

「僕の家で観ればいいじゃん」

「家でゆっくり観たいんです」

「僕の家でゆっくり観ればいいじゃん」

釈迦に説法だ。為すすべもなく吉村に引かれていく。

十メートルほど引きずられたところで、突然、吉村の手が離れる。咲子は訝りながらも赤くなった腕をさすり、彼の微動だにしない後頭部を見つめた。

「ビンビンきてる」と彼はつぶやく。

意味が分からず、本気でなにかの隠語ではないかと疑いながら吉村の横顔をのぞき込む。その顔面に表情らしきものはなかった。なんだか嫌な予感。

「ビンビンて。あたしを部屋に連れ込んでどうするつもりでしょうね」

「咲子さんの頭の中はそればかりだね」

吉村の尻を蹴りつける。犬みたいな声があがった。

尻をさすりながら、吉村がぼつぼつと歩を進める。咲子も黙ってそれに続いた。

「見られてるよ、僕たち」

「誰に？」

吉村は答えなかった。歩きながら、咲子はあたりを見回す。後方には徐々に小さくなっていく高校の校門。そこから続々と出てくる我が校の生徒たち。左を見れば国道があり、その先には店が立ち並んでいる。コンビニ、屋台のクレープ販売、レンタルDVD店、家電製品の小型量販店など。これから寄り道するマックも、国道のはす向かいの先にある。人通りが激しく、不審な影などは見分けられない。

「たしか、この近くに公立中学があったはずだ」

吉村が前を見据えたまま口ずさんだ。

「小夜ちゃん、もしかしたらそこに通ってるのかもね」

吉村と視線を絡める。咲子は鬱陶しそうな顔をして、吉村は瞳の奥から愉悦を覗かせた。すると、吉村が必要以上に顔を近づけてくる。たじろぐ暇もなく、軽く咲子に口づけすると、彼はうっすらと微笑んだ。

背後から、見知らぬ女生徒の冷やかすような声が聞こえた。咲子は肩をすくめ、微妙な距離を置いて吉村の背中を追いかける。

「なに考えてんの」

唇に残るおぞましい感触を払拭するように訊く。吉村はあざとく首を傾げ、くすくすと笑った。

「今は咲子さんのことしか頭にないよ」

「見え透いた嘘だこと」

「まあね」

もっと冷静にならなければいけない。そうは思いつつも、奈緒ちゃんの両手に関してだけは、わたしの執心は取り払えなかった。

バナナクレープを頬張りながら、真白商業高校の校門を監視する。昨日はずる休みしたため、まだ風邪気味だと先生に告げて自然な流れで早退してこれた。わたしが食べているのは二つ目のクレープで、一つ目はイチゴとチョコレートのクレープを食べた。そのクレープ屋台は驚くほど繁盛してなくて、いくらのおびり食べていようと、斜め後ろでぼんやりと突っ立つ屋台のお兄さんは一切わたしを注意してこない。

わたしは長椅子の一番はじっこに座っていた。すぐ目の前に屋台の看板が置いてあり、その看板からひょっこりと顔を出す形となっていた。なるだけ身体を隠せる良い配置だと思う。

バナナクレープを食べ終えたところで、真白高校のチャイムが聞こえた。時刻から察するに、あれが放課後開始を告げる本鈴だろう。

わずか数分ほどで校門前に姿を見せたのは一人の男子生徒だった。石の壁に背を預け、何をすることもなくぼうっとしていた。

何気なしにその男の子を眺める。高校の校門は、国道を挟んださらに先に位置しているので、必然、男の子の顔は遠くて分かりづらい。それでも、彼がなかなかの美形だということはこの場所からでも分かった。顔だけでなく、雰囲気や立ち姿だけでも十分伝わる。

最近、わたし自身について自覚したことがある。わたしは人一倍、他人に憧れやすい体質なのだと思う。昨日、咲子さんの容姿に見とれたように、あの男の子にも少しばかり心を奪われていた。

仕事や勉強が出来たりといった能力的なことにも魅力を感じるけど、わたしはなにより、見た目が美しかったり、格好良かったりするものが何よりも好きだった。

わたしは背が低いし、中三なのに子供っぽい顔をしてるから、未だに小学生と間違えられてしまう。勉強や運動が出来ないのはもともとだったけど、最近になって、わたしは自分の容姿にまで劣等感を抱き始めていた。奈緒ちゃんや、咲子さんや、あの男の子みたいに、人から羨ましがられるものを持つ人を見ると、わたしは羨望を禁じえない。ずっと遠くから眺めていたいって思う。ときには、欲しくてたまらないって思ってしまうのだ。

どうしちゃったんだろう、わたし。たぶん昔は、こんなんじゃなかったと思うけど……。

校門前で動きがあった。

男の子が、ある女子を呼び止めていた。いや、呼び止めるというより、無理矢理腕を掴んで引きとめていた。

女子生徒が振り返る。わたしは目を見張った。男の子に捕まえられたのが、咲子さんだったからだ。

しばらくの押し問答の末、二人は並んで歩き出した。

あの男の子は咲子さんの何なんだろう。あの様子からして、やっぱり二人は付き合ってるのかな。二人とも美形だから、わたしは純粋にお似合いだと思った。

じっと見つめていたが、途端にわたしは目を覆いたくなってしまう。あろうことか、公衆の面前で二人がチューしていたのだから。

やっぱりそうなんだ。二人は恋人同士で、みんなの前でいちゃつけるくらい形振り構わず愛し合っている。

胸のうちに溶けた鉛みたいなものが奔流する。

わたしは昨日まで、咲子さんを絞め殺して、奈緒ちゃんの手を取り返そうと考えていた。しかし、もっと胸のすくような復讐もあるのではないか。

あの女は、人が死ぬほど大切にしているものを平然と掠め取った。それなら、あいつが大切にしているものだって、仕返しに壊してしまっても文句は言えないだろう。復讐としては実に効果的な気がする。

ただし、果たしてわたしにそれだけのことをする余裕があるのだろうか。今この瞬間だって、警察に肩を叩かれて逮捕されやしないかとびくついているのだ。そうでなくとも、既に私服警官にでも尾行されているのかもしれない。

この疑心暗鬼の不安定な精神状態の中、うまく咲子さんを貶めることなんて出来そうもない。それより、今最も重視すべきことは奈緒ちゃんの手のことだ。悔しいけど、わたしはあの手を取り返す術を一番に考えなければいけない。

咲子さんと男の子はマックに入り、テイクアウトで紙袋を下げて出てきた。わたしは二人のあとを追う。

二人が向かった先は、咲子さんの住むマンションだった。あの男の子は、咲子さんの部屋に平気で入れるくらいの深い間柄なのだろう。

マンションの向かいに古本屋さんがあった。わたしはそこに入り、立ち読みするふりをして、窓越しにマンションの玄関を観察した。今日はちょうど塾もお休みだ。男の子が出てくるまで待つてやろう。

しかし、夜の八時を回っても男の子は出てこなかった。もう高校生だから、家の門限なんてものはないのかな。

一方のわたしは、そろそろお父さんが家に帰ってくる頃なのでそわそわしていた。

今日は諦めてもう帰ろう、そう思い直し、これ以上の監視をあきらめた。

それからというもの、学校帰りで塾がお休みの日は毎回、わたしは二人の動向を観察し続けた。咲子さんと男の子はいつも一緒だった。たまに手をつないで歩いたりするし、道の真ん中で平気でチューをしてしまう。二人がカップルであることはもう間違いない。そして毎回、最後は男の子をマンションに連れて、二人っきりで夜遅くまで過ごす。咲子さんの家族らしき人物は今まで一度として見たことがない。高校生だからそれはないだろうと思っていたけど、もしかしたら咲子さんは一人暮らしなのかもしれない。

薄々感づいたことがある。二人はもともと、ここまでべったりだったわけではないんだと思う

咲子さんはきっと、あの男の子に守ってもらっているんだ。彼女はきっとわたしの影におびえている。

考えを変えると、奈緒ちゃんの手を持ち去ったのが自分だと自ら教えているようなものだ。

わたしはこれまで、警察に捕まるどころか、家に訪ねられたり、疑われたりするようなことなど一度としてなかった。奈緒ちゃんの手が、まだ咲子さんのもとにあるということは明白だ。

どういう理由で手を所有し続けているのか、わたしには想像もつかない。ただ、奈緒ちゃんの手がちゃんと冷凍庫などで保管されているか、それだけが現時点での一番の懸念事項だった。

ある日の土曜日。

昨日の金曜日、わたしはいつものように咲子さんと男の子の学校帰りを尾行し、二人が夜中までマンションから出てこないことを確認して大人しく帰宅した。

そして、今日は早起きをしてマンション向かいの古本屋で待機していた。もしかしたら、男の子は昨日、そのまま咲子さんのマンションに宿泊した可能性がある。

もし男の子がマンションから出てきたら、わたしはなにかしら行動を起こそうと思っていた。朝の十時。

男の子がマンションの玄関から出てくる。もう春も終盤のため、彼は涼しげな半袖のポロシャツを着ていた。昨日は制服でマンションに入ったはずだけど、あらかじめ普段着でも持ってきていたのだろうか。わたしは呼吸を止め、彼の肩にかかったものを注視する。

わたしのクーラーバッグだ。まさかあの男の子があれを持ち歩くなど、想像だにしていなかった。あれは何を意味しているのか……。

まず前提として、あれに奈緒ちゃんの手が入っているなんてことはあり得ないだろう。もし警察の職務質問でも受けて、バッグの中身を見られでもしたら、それであの人は事件の犯人扱いになってしまう。だから奈緒ちゃんの手はあのバッグ以外の場所ということになる。

じゃあ、どうしてわざわざ、あのバッグで外出してしまうのか。理由は一つしか考えられない。

彼はわたしをおびき寄せようとしているのだ。街中でわたしと出会えるかもしれないと踏んだのか、それとも、わたしのこの監視自体に気づいているのか。どちらにしても、肝心の目的が読めない。わたしを誘導して、一体どうするつもりだろう。

わたしは意を決し、手にした漫画雑誌を棚になおした。古本屋を出ていそいそと彼を追いかける。その際、チュニックの上から羽織ったパーカーの着崩れをなおし、ポケットの中に手を差し入れる。そこには小さなナイフが入っていた。十徳ナイフのような小柄なもので、数回使えば折れてしまいそうな代物。でも、一回だけなら十分に使えるはず。

受けて立ってやる。どうせ奈緒ちゃんの手を警察に届けるつもりなんかないんだ。今の現状がそれを明確に物語っている。

本当ならこのままマンションに入って、奈緒ちゃんの手を探したり、咲子さんを襲ってあげてもよかった。だけど矛先は、まずあの男の子へと向いていたのである。

馬鹿にされてるみたいで、むかついたから。

しばらく歩くと、男の子が公営図書館に入った。

わたしもたまに行く図書館。数分の間を置き、わたしも入館する。

この図書館はさほど広くはない。市の中心街にあるし、施設内に喫茶店や民族資料館を併設してあるからだ。少し歩くだけで館内を見て回れるけど、しかし、何故かあの男の子が見あたらない。

念のため喫茶店や資料館も覗いてみる。やっぱり、どこにも居なかった。お手洗いにでも入ったのだろうか。

図書スペースに戻る。適当に参考書コーナーなどを眺めて時間をつぶす。男の子がここに入ったのは間違いないので、ときおり館内中を調べ回ったりもした。

そんな中、わたしはある本に目移りしてしまう。

フランシスコ・ゴヤの画集だった。なんとなく、わたしはこの人を知っていた。たしか美術の教科書にも数作品載っていたはず。教科書の説明に、戦争の悲惨さだったり、人間のうちにある野蛮性を表現する画家と書かれていた。

画集のページをめくっていき、はたと手を止める。

それは、わたしがこれまで見てきたどの西洋絵画よりも衝撃を受けた絵だった。そして、目を逸らしたくなるほどの戦慄とおぞましさを知った作品。

描かれているのは老年を思わせる長身の怪物。怪物は人を喰らっていた。それも、幼児ようにいたいけな小さな身体をである。幼児の頭部はすでに怪物に喰いちぎられており、生々しい色をした血液が喰われた箇所から流れている。

わたしが一番苦手なのは、この怪物の光を感じられない目だった。渴望し、何かに怯えているようで、なのに諦めを知らない執念深い目。死に際の老人が惨めたらしく生にしがみついているように見える。

醜い、と直情的に思った。手が汗ばみ、自然と眉根にしわが寄る。しかし、わたしは本を閉じなかった。

愕然としていた。わたしは今、この絵を通して自分自身を振り返っていたのだ。自分と重ねていた。現在のことはもちろん、強制的に過去のことまで想起させられる。

途端に吐き気がおそってくる。しかし、わたしの胃は逆流を許さなかった。身体が覚えている。あのときの味も、あのとき感じた恍惚も、涙を流しながら覚えた感動さえも。

本を取り落とす。硬質のハードカバーが図書館の床とぶつかり、乾いた音が館内に響く。わたしは後ずさり、背後の本棚にぶつかった。周りから送られる好奇な視線もやがて希薄になっていく。

どうして今になって思い出してしまったのだろう。思考が倒錯する。どうして今まで忘れたままでいられたのか。

やだ、わたし、こんなはずじゃなかったのに。

劣等感なんてものじゃない。わたしはもともと醜いやつだった。わたしが最も嫌悪すべき存在は、わたし自身だったのだ。

床に落下したゴヤの画集は、なおもあのページで開かれたままだった。怪物の真っ黒な双眸がわたしを捉えた。

悲鳴を上げそうになる。そのとき、ある手が画集へと伸びた。その手は丁寧にほこりを払うと、事も無げに本を拾いあげた。

わたしは少しずつ視線を上方へと向ける。

そこに立っていた少年を見た瞬間、わずかばかりだが、身体中の毒気が中和された気がした。「サトゥルヌスの絵。そんなに恐かった？」

彼は瞳を細める。あの男の子だ、とすぐに思い出した。パーカーのポケットに手を入れ、ナイフを抜き出そうとしたが、骨を抜かれたように上手く力が出せない。

「この絵をおぞましいと思うのは、いたって普通の感覚だ。本来、食人はおぞましい行為でなければいけないからね。だけど僕は、人肉食をひと括りにして差別したくはない」

男の子が一步あゆみ寄る。わたしは背中を本棚にはばまれ、それ以上後退できない。

彼が画集を差し出した。わたしは立ちすくんだまま、ためらいながらもそれを受け取る。恐る恐る画集の表紙を見つめるわたしに、男の子は柔和な笑みを向けた。

「たとえそれがどんなに非人道的な行為だって、僕の理解にすら及ばなくたって、その中に人間的なものを垣間見ることが出来たなら、僕はそれで満足だ」

わたしは唾を飲み込み、彼を見上げた。

「.....わたしに、何か用ですか」

「別に。ただのナンパ」

意味の分からない返答をされ、わたしは言葉を失った。ナンパって、いったいどういう口説き文句だろう。

「実は僕、ロリコンなんだ。どうかな、その辺でお茶でも」

六話

男の子は吉村浩介と名乗った。わたしもその場で簡単に自己紹介をすると、そのまま流されるように彼に連れられた。

吉村さんは迷いのない足取りで施設内の喫茶店に入っていく。そのお店は半分ケーキ屋さんのような品ぞろえになっていた。

「好きなものを頼みなよ」

ほんとうは遠慮したかったけど、わたしは断れなかった。お腹が空いていたし、気のせいかな、強制をあおるような雰囲気吉村さんにまとわりついているように思えた。

「このバッグ、気になる？」

窓際の四人用テーブルに着くと、吉村さんがいきなりそう言った。右手にあのクーラーバッグを持ち上げる。

わたしは無意識のうちにバッグへと視線を向けていたのだろうか。いや、そんなはずはない。むしろ努めてバッグから注意を逸らそうとしていた。

「べつだん、気にしていません」

わたしは試されているのだ。咲子さんがわたしを犯人と疑い、このバッグを奪ったように、吉村さんもわたしの揚げ足を取ろうと目を光らせている。

「この近所で殺人があったことは知ってるよね」

吉村さんが膝の上にバッグを置いた。わたしは落ち着いた口調で答える。

「全国ネットでも大きく取り上げられていました。特にこの町では、知らない人の方が珍しいと思います」

奈緒ちゃんは天才ピアニストとして一時期、全国的に話題となった著名人だ。こんな田舎町で起きた事件だとはいえ、奈緒ちゃんが被害者ならば話は違う。

「両腕がまだ見つからないらしい」

「みたいですね」

吉村さんにはこりと微笑むと、窓の外に目をやった。

「僕ね、こういう話題にはすぐ飛びついちゃうんだ。趣味が悪いってよく言われるけど」

そう言うと、彼は黙り込み、窓際の人通りの流れを観察するように視線を止めた。わたしはその横顔を眺める。

作り気のない端正な顔立ち。柔和に細められた瞳は咲子さんとは対称的で、万人に好印象を与えそう。いい加減に切り詰めたような髪型なのに、それでも爽やかに見えてしまうのはどうしてだろう。これが草食系ってやつなのかも。

ときに、と彼の薄い唇が開く。

「小夜ちゃんは、人間の『しょくせい』って信じる？」

「しょくせい？」

聞き慣れない単語に首を傾げる。しょくせい。まっさきに変換出来そうな漢字でいえば、『食性』だろうか。

「君がいま想像している通り、食べるに性と書いて食性。草食性だとか、肉食性とかっていうあれ」

「それなら、人間はみんな雑食性だと思いますけど」

「大別してしまうとそうだけど、僕はそうは思わない」

変なことを語る人だな、と思ったが、わたしは大人しく聞くことにした。

「人間は、もともと穀菜食動物だったという話がある。たとえば、ガンやその他生活習慣病への主な原因が、消化に深く関係していることは有名だよ。極端な話、消化さえスムーズにいけば病気にはかからない。穀菜食は全般的に、この消化プロセスを円滑にしてくれるんだ。ほら、ダイエットにも最適だし」

「ダイエット……」

ちょっと気にしていることなので思わず反復してしまった。吉村さんは笑いながら、小夜ちゃんにはダイエットなんて縁のない話だろうけど、とお世辞を挟んだ。どこまでが本音か分からない。

「言ってしまうと、病気になりたくないなら、最初から肉なんか食べなければいいんだと思う」

乱暴な考え方だ、とわたしは思った。しかし、こちらが口を挟む隙もなく彼は続ける。

「そもそも、人は穀物や野菜だけでも充分生きていけるはずなんだよ。身体のほとんどがアミノ酸で出来てるって言われるくらいだし、突き詰めれば、穀物だけでも生きていけそうだよ」

「肉からしか得られない栄養もあるんじゃないですか？ たとえば……」

ちゃんと言い返せない。こういう常識をくつがえすような話なんか、今までしたことない。

「強いて挙げればたんぱく質か。でも、大豆にだってたんぱく質は多く含まれてるよ」

「吉村さんは、人がみんな穀菜食主義になればいいって、そう言いたいんですか？」

吉村さんはゆるい動作で首を振った。

「人は穀菜食で生きられる生物なんだって話をしただけで、なにも僕は、みんなに穀菜主義を勧めたいわけじゃない。皆が皆そうなら、とてもつまらないと思う」

わたしにはもう、彼がなにを言いたいのか理解できない。

やがてアイスティーが二つ運ばれてくる。店員さんが、チーズトーストはもう少々お待ちください、と告げた。

わたしは渴いた口内を潤すように一口すすった。吉村さんは手をつけず、優しげな目つきでわたしを見つめるばかりだった。

恥ずかしくなって、わたしは視線を落とす。そうだ、わたし今、ナンパされてるんだっけ。彼には咲子さんがいるし、名目上だってことは分かってるけど、でも、なんだか緊張する。

「人間は単純じゃないし、何に対しても面白みを求めるから。食べなくていいものをわざわざ好んで食べる。生きる術ですら、娯楽へと昇華できる」

「結局、なにが言いたいんですか……」

そう問いつつも、わたしにはだんだん、吉村さんの主張が読めてきていた。

「人が雑食性になったのは、人間が自ら望んで多様の食性を生み出した結果だと思わない？」

わたしは押し黙り、吉村さんの言葉を促すしか出来なかった。

「さっきの絵。食人もまた、人の望んだ食性の一つだと僕は思う」

ゴヤの絵が脳裏によみがえる。瞼を閉じると怪物の目を思い出してしまいそうで、わたしは目が乾くのを我慢してアイステーを凝視した。

「ただの肉食性とは違う、ってことですか」

「近いと言えば近いけど、でも、根本が違うからね。どの食性とも違う。とくに食人の場合は」

何故、食人が禁忌とされるのか。頭で考えなくても本能で分かる。だからわたしは、あの絵に嫌悪感を覚えた。

「子孫繁栄に対する冒涇なんだ。人が人を喰らい、同種族を減らしていくという行為そのものが。だからみんな、あの絵に生理的な不快感を抱く」

否定したい。さっき、吉村さん自身の口から「人間は単純じゃない」という言葉が出た。いくら本能だからとはいえ、そんな原始的な倫理に縛られるのだって安易だ。わたしだって、子孫繁栄の冒涇なんて大それた理由で奈緒ちゃんを食べようとしたわけじゃない。

「草食性でも、肉食性でも、雑食性でもない。人肉食だなんて、それこそ鬼のような食性じゃないか」

違う。やっぱりわたし、鬼なんかじゃない。邸宅の中で獰猛な息をまき散らし続ける野蛮な鬼なんかと、一緒にしてほしくない。

店員さんがチーズトーストを運んでくる。湯気がチーズの香りを乗せ、鼻腔に絡んで食欲を誘う。

そうだよ。わたし、普通の食べ物にだってお腹を空かせられるじゃん。わたしはただの食人鬼とは違う。奈緒ちゃんだから食べたいって思ったんだ。

トーストの端に噛みつく。チーズのなめらかさとトーストのぱりぱりした触感が同時に舌を満足させる。ほら、美味しい。わたしにも普通の味覚が備わっている証拠だ。

「食事時にこんな話をして大丈夫だったかなと思ったけど、よかった。こっちのお腹が空いてくるくらい良い食べっぷりだ」

意識せず、わたしは顔をあげて吉村さんを睨んでいた。

皮肉に聞こえてしまったのだ。普通の人なら、食人話のあとでのご飯なんか、気持ち悪くて喉を通らないだろうって。わたしが人間と他の食物を同等に見ているんだろうって、そう揶揄されているように聞こえた。

「なんで今、そんな話を」

「例の事件の被害者、枝野奈緒子。彼女の腕の一部に人の歯形があった。僕にはどう考えても、それがカニバリズムによるものとは考えられない」

「彼女の両腕は見つかってないんですよね。どうして吉村さんがそのことを知ってるんですか？」

わたしは彼の隣のクーラーバッグを気にした。それを見抜くように、吉村さんがこう切り返す。

「察しの通り、このバッグは拾いものだ。例の事件の証拠品らしきものが入っていたよ。うちの

連れが偶然見つけて、見かねた僕が拾ってきた」

連れとは、つまり咲子さんのことだろう。わたしはあえてそのことに触れず、反駁した。

「なぜ警察に届けなかったんですか？」

吉村さんはバッグの上に手を置き、微笑を浮かべた。その飄々とした態度にいらつき、わたしは声を荒げる。

「わたしを疑ってるんですよね。はっきり言ってください」

「疑ってるよ。確信してると言ってもいいくらい」

「なら、どうして警察に……」

周囲の視線を感じて言葉尻を切る。代わりに息を深く吐き出し、吉村さんと目を合わせた。

「警察なんかには届けられないよ。僕は、きみを理解してあげたいと思っている。なんせこれ、ナンパだからね」

この後に及んでこの人は、なんて意味の分からないことを。

「何が言いたいんですか」

「何がもなにも、額面通りに受け取ればいい。僕はただ、君が人を食べようとした訳を知りたい」

呆れてものも言えない。だけど、わたしはまだ冷静を解いてはならない。ここで犯人と認めてしまえば、また咲子さんのときみたいに嵌められかねないのだ。

「まさか、あのバッグがあった場所に、たまたまわたしが居たからって、それだけの理由で犯人扱いですか？ わたしが奈緒ちゃんを殺した証拠には」

「奈緒ちゃんね」

ぎくりとして口をつぐむ。冷静にと自分に言い聞かせておきながら、さっそく彼女を愛称で呼んでしまった。

吉村さんの手元に置かれたグラスの氷が溶け、からんと音を立てた。彼はあれから一切アイスティーに手をつけておらず、なのに、やけに涼しげな顔で舌を回した。

「きみはあの日、咲子さんと会ったね。そして、彼女に自宅まで送ってもらった」

これは肯定しても問題ないだろうと思い、わたしは正直にうなづく。

「わたしが、あの日あの時間に森林公園に居たこと、さっきも言った通り、認めます。そのバッグがわたしの居た辺りに落ちていたことも信じます。だけど、それだけでこういう扱いを受けるなんて、納得がいかないんです」

「このバッグに入っていたものが、どうにも引っかかった」

吉村さんはわたしの反論を受け流した。

「まず、凶器と思われる血の付着した包丁。その柄の部分に貼られた、店舗名を示すシールがね」

シールなんて貼ってあったかな。よく覚えていない。焦ったけど、わたしは出来るだけ表情を変えないように努めた。

「真白ヶ丘駅から十駅以上も離れたN駅。調べてみるとね、そのN駅前のホームセンターで買われたものらしいんだ。だから、犯人は遠方に住む者だという可能性も払拭できない」

そうだろう、とわたしは勝ち誇る。そう思ってもらうために、わざわざ遠くのお店まで出向いたんだ。

「それを差し置いても余りある、近隣住民への疑いだ」

吉村さんの顔つきが若干固くなる。

「まず、枝野奈緒子の腕を包んでいた数個のドライアイスの小袋。無地透明の袋に、もとは固形状だったと思われるドライアイスの残骸。あれはどうやら、近所のスーパーで入手した物のようだ」

「どうして、そんなことが言えるんですか」

「この町のスーパーで提供されるドライアイスは、そのほとんどが粉末の状態でしか手に入らないらしい。今どき固形状でくれるスーパーなんて、県内中探してもあそこくらいだ」

どこかで聞いたことがある。最近はどここのスーパーも、触ってもすぐに流れる粉末状態で提供するんだって。わたしはあのとき、ドライアイスの一つの袋にまとめようとは考えなかった。固形状のものは、より危険だと知っていたから。

「それが、あのスーパーだけだなんて。そんなこと、なんで吉村さんが……」

「固形のドライアイスに気づいたのは、残念ながら僕じゃないよ。全部咲子さんからの受け売り。ギャルっぽい顔してるくせに、あのひと意外と家庭的だからね」

吉村さんは冗談めかしたように笑う。わたしはその笑い声に同調できない。

「犯人が近辺に住む者だと推測できる、もう一つの理由」

わたしはもう、彼から目を逸らしていた。

「事件現場と、バッグが放置されていた場所の位置関係。およそ百メートルくらいかな。事件発生後、おそらく咲子さんは三十分としないうちに森林公園に向かった。その短期間で、しかも、『多目的広場』にこのバッグは置かれていた」

「公園内の場所が、バッグの位置とどう関係があるんですか」

「この市に住む者なら、みんな知ってるはず。現場からもっとも近い『やすらぎ広場』より、そこから少し歩いた『多目的広場』の方が、一時的にバッグを置くには都合がいい。何故かは、小夜ちゃんにも分かるだろうね」

吉村さんはいやらしい質疑だけを提示し、理由をわたしに述べさせようとしていた。幾分諦念し、声を小さくして応答する。

「『やすらぎ広場』は、ホームレスの溜まり場だから、でしょうか」

「その通り。それに対して『多目的広場』は公園奥地にあるため、夜になれば人通りはほぼ皆無だ」

言うまでもない。だからわたしは、わざわざ多目的広場まで歩いたのだから。

「でも、そんなの市の住民じゃなくたって知ってる人は沢山います。あの森林公園は県内でも有名な観光名所ですよ」

「これもあくまで、可能性の一つだからね」

ここでようやく、吉村さんはアイ스티ーに口をつけた。小休止を入れるように、ストローなしで深くグラスを傾けていく。まだ何かあるらしい。焦らされることにまた苛立ちを覚えた。

音もなく、グラスの底がテーブルに着地する。

「ここからがもっとも重要だ。気になる犯人像について」

息を呑み、吉村さんの話を促す。

「血飛沫の付着した合羽が入っていた。無論、あれは服に血が飛び散らないようにするための配慮だろう」

件の雨ガッパを思い起こす。あれは以前お父さんが使っていたもので、もちろん大人用だ。直接わたしと関連するようなことがあるのだろうか。

あることを思い出し、わたしは言葉をなくした。

「不思議なことに、雨合羽の裾が破けていた。成人用の合羽のようだったけど、犯人の身長には合わなかったらしい」

奈緒ちゃんの解体作業中、わたしはカッパの裾に足をかけて転んだ。あのとき、たしかに確認した。裾の部分が破けちゃったけど、作業上では問題ないだろうって。

それが身長特定につながることまでは、考えにも及ばなかったけど。

「嫌がる咲子さんに土下座して頼み込んで、やっと着てもらえたよ。咲子さんの身長は160前後だけど、合羽の裾はなんとか踏まない程度だった。破れた位置から推し測ると、犯人の身長は140から150cm。ちょうど、小夜ちゃんと背比べが出来そうな感じだね」

すると、ふいにわたしの手が引かれた。心臓が止まりそうになるほど吃驚し、わたしの手を取る吉村さんを見返した。

「そして決定的なことに、被害者の腕に血痕が付いていた。小さな、人差し指の痕だよ」

吉村さんの手は、わたしの人差し指を握っていた。握られたという感覚がないほどに優しく、わたしの指は根本から先端まで撫で上げられる。背筋が震え上がり、意識せず呼吸が荒くなっていく。

「バッグの中には新品のゴム手袋も入っていた。どうしてこれを使わなかったのかと思ったけど、そこは、犯人も人の子だからだろう。どうせ持ち去る腕に血痕が付着しても構わないと楽観したか、それとも、よほど焦っていたのか。何にしても、本当にそそっかしい犯人だ」

三日月型に吉村さんの口元が緩む。わたしは目を離すことができない。指が解放されると、わたしの手は力なくテーブルに落ちた。

「ここも引っかかっていたんだ。どうして犯人は、手間を惜しんでまで公園に立ち寄ったのだろうと。でも、これで解消した」

そうだ。そもそもわたしは、血で汚れた手を洗うために、あの公園に赴いたのだ。もしあのときゴム手袋さえ着けていれば、あの公園に出向くこともなく、咲子さんと出会うこともなかったし、バッグも奪われなかったはず。今、こんな状況に陥ることもなかったかもしれない。

「合羽の破れた裾の位置、被害者の腕に着いた指の血痕から、犯人は極端に背の低い女性か、小中学生の児童だと推測できる。そして、被害者は中学生の女の子だ。すなわち、最も彼女と関連性を見いだせるのは、身長的にも納得のいく同世代の女の子だろう。これで犯人の移動手段の偏りにも納得がいく。成人女性なら出来ても、中学生なら限られることも多い」

思考がから回って上手く理解できない。それでも、わたしが追い詰められているのだというこ

とは、なんとなく分かった。

「したがって、あの時間に森林公園に居た小夜ちゃんは限りなく疑わしい。どうだろう、状況証拠のこじつけ論だけど、案外、的を射ていたんじゃないかな」

「あの、わたし……」

捕まりたくない、と言えるだけの権利が自分にはよく分かる。でも、嫌なものは嫌なんだ。だってわたし、まだ奈緒ちゃんのこと、ちゃんと味わってない。あんなに頑張っ手に入れたのに……。

「勘違いしないでほしいのが、僕たちは別に、きみの敵になりたいわけじゃない」

わたしが嗚咽し始めたことを気遣ってか、吉村さんが優しく声をかける。

「どうして咲子さんが、あのとき君にコーヒーや飴を勧めたのか、分かる？」

泣き声を上げないように注意しながらうなづく。吉村さんに追い詰められながら、わたしはあのときの咲子さんを思い出していた。

咲子さんは、わたしの口の臭いを気にしてくれたんだ。口どころか、わたしの身体中はきっと、奈緒ちゃんの臭いで充満していたのだから。

「もう一度訊くよ」

吉村さんが丁寧に問う。

「どうして枝野奈緒子ちゃんを食べようと思ったの？」

わたしは両膝に手を添え、テーブルクロスの模様を落とす。

奈緒ちゃんの全てを奪ってまで、奈緒ちゃんを食べようとした理由。禁断に足を踏み入れてまで奈緒ちゃんを欲した理由。

彼女に失望したから——それが直接食べたい欲求に繋がったわけじゃない。

壊したいくらい好きだったから——本当にそうだろうか。

憧れを手に入れなかった——二度と彼女の演奏を聴けなくなるのに？

どれもピンと来ない。自分のことがここまで分からないなんて、わたしは、頭がおかしくなったのだろうか。それとももう、すでにわたしの中に鬼が棲み着いているからなのか。

「ちょっと、お手洗いに行きます」

席を立ち、返事も待たずにトイレへと向かう。斜め下を向き、他のお客さんや店員さんとも顔を合わせないようにした。

わたしは誰にも顔向け出来ないくらい、醜いやつになってしまったのだ。

トイレから出て吉村さんのもとへと戻る。吉村さんは椅子に横向きで座り、窓の外を見ながら携帯で誰かと話していた。さんざん自分は敵じゃないと言っておきながら、やっぱり、警察に通報しているんだろうな。

静かに彼の正面に腰掛ける。

本当なら、このまま逃げることで出来たはずだ。しかし、わたしはそうしなかった。

何故なら、わたしはまだ、奈緒ちゃんの手を返してもらっていない。どれだけ自分を嫌悪した

ところで、それだけは変わらなかった。動機すら判然としないまま、しかし奈緒ちゃんに関してだけはどこまでも貪欲に欲する。もしかしたら、最初から動機などなかったのかもしれない。わたしはただ、鬼の食性のままに奈緒ちゃんを求めただけなのだろうか。

これだけ自分が嫌なのに、どうしても我慢できない。

そこで吉村さんが通話を終えた。閉じた携帯を片手に、首だけを傾けてわたしを流し見る。

「おめでとう、小夜ちゃん。事件が解決するってさ」

意味が分からず、啞然として吉村さんの笑みを見つめる。そして彼は、さらに理解しがたい事を口走った。

「代理の犯人が捕まった」

新築分譲マンションの最上階、ある一室のインターホンを鳴らす。まもなくして玄関扉を開けたのは、エプロン姿の咲子さんだった。彼女はわたしたち二人に虚を突かれてしばし固まった。

背後から、ご機嫌そうな吉村さんの声がある。

「本日をもって疑似新婚生活は終了です」

「軟禁生活、の間違いじゃないかな」

エプロンを脱ぎながら咲子さんは言う。そのままぐしゃぐしゃに丸めて後ろの廊下に放り、「よっしゃあ」というような意味の雄叫びをあげた。

通されたのは十五帖ほどの広いリビング。キッチンと地続きになっており、余計に広大に見える。部屋の中央に革張りのソファ二つとガラステーブル一台が川の字で配置されている。部屋の角には大インチの薄型テレビ。その対角線の角にはパソコン台もある。

でも、家具らしきものはそれだけの殺風景なりビングだった。

「あたしが来る前はゴミ屋敷同然の有様だったけど」と咲子さん。

吉村さんは恥ずかしそうに頬を掻き、「咲子さんって、無機物には容赦ないよね」と意味不明なことをつぶやいた。

エプロンを脱いだ咲子さんの格好は、すごクラフだった。涼しそうなタンクトップに、下は高校指定らしき紺のジャージ姿。頭の上では、いい加減にひつつめたようなお団子を作っていた。ソファーに寝転がると、さっそく棒付き飴をくわえて、動物のようなうめき混じりに伸びをした。わたしはそんな咲子さんと正反対で、終始落ち着けずに壁際で突っ立つばかりである。

吉村さんが苦笑した。

「炊事洗濯掃除以外はずっとこの調子。家主の僕よりくつつろげるんだから、彼女の肝っ玉の強さったらないよ」

わたしは今まで、このマンションはてっきり咲子さんの住居だと信じていたのだが、どうやらわたしはあの日、咲子さんに嘘を吐かれたらしい。

しかし不思議と怒りは沸いてこない。今は脱力することでいっぱいだった。いまだに、現状把握がうまく出来ない。

「小夜ちゃん、こっち」

パソコンラックのそばに立つ吉村さんが手招きをした。わたしはデスクチェアに座らせられ、モニターに表示された記事を読むように吉村さんから指示される。

「そのあいだ、お茶でも煎れてくるよ」

吉村さんがキッチンへと去っていく。わたしは呆然として、小棚からお茶葉を探る吉村さんの背中を眺めた。

「あいつのこと、あんまり信用しない方がいいよ」

テレビを点けながら咲子さんが話しかけてくる。

「吉村くんは人間のクズみたいなやつだからね」

「咲子さんだって嘘つき妖怪でしょ」すぐにキッチンから反論が飛んでくる。吉村さんがキッチ

ンカウンターから不機嫌そうな顔を出した。

「聞いてくれよ。この人、ここに居座るあいだ、カレーしか作ってくれなかったんだ」

「居座るってなに？ あたしは身を粉にして吉村くんのわがままに付き合っただけなの。ご飯作ってもらえるだけ有り難いと思ってよね」

息を吸うように口喧嘩を始める彼らにわたしはまた混乱してしまった。この二人って、付き合ってるんじゃないかって。

居心地が悪くなってパソコンへと目を移す。違和感の根元はそこにもあった。

見たこともない出版社のニュースサイト。黒字に白の小さなフォントで、一記事読むだけで目が疲れてしまいそう。記事のタイトルには『某年少ピアニストの不審死 謎を呼ぶ事件の末路』とある。

慎重に文字を追っていく。

――M市の私立中学に通う女生徒が殺害された事件で、S県警T署は二十日、住所不定無職の男を強姦と殺人及び死体遺棄の疑いで再逮捕した。

匿名性の高い怪しいニュース記事だけど、これが奈緒ちゃんのことを指す殺傷事件だということは容易に汲みとれる。この一文を二度三度、繰り返し読み返す。

男。強姦、殺人、死体遺棄、逮捕。たしかに、そこにはそう書かれていた。しかも二十日って、今から八日も前のことだ。

「正確には強姦じゃない」

わたしの手元に湯呑みを置きながら、吉村さんが感情のない目で画面を見つめた。

「彼女は絶命したのちに犯された。この男にね」

「これ、どういう」わたしは頭を抱えた。「誰なんですか、この男……」

奈緒ちゃんが犯された。わたしと同年の、あんなに毎日が輝いていた女の子が、あろうことか、わたしが殺したあとに。

「君は知らないんだね、この男を」

「知るわけありません。誰ですか？ 奈緒ちゃんに、こんなひどいこと、」

それっきりわたしは閉口した。わたしが言えた義理じゃない。彼女を殺したのは、間違いなくわたしなんだ。そのせいで奈緒ちゃんは物言わぬ人形となった。彼女の体は無防備になり、それを狙った卑怯な暴漢魔に……。

「本当に、小夜ちゃんは見えないんだね」

「だからっ……」

絶句し、それ以上の否定を止める。暴漢魔。物欲しげに奈緒ちゃんを見下ろす、卑劣で哀れな巨大な人型。

あの廃墟邸宅に居た黒い影だ。あの血走った目は、犬や猫でも、ましてや、わたしの想像する鬼でもなかった。全ては錯覚だったのだろうか。あれは、わたしの錯乱した衝動が創り出したに過ぎない、単なる幻影だったとしたら。

背筋に冷たい液体を浴びせられたような感覚。やはり、あのときのわたしは普通じゃなかった。幻覚や妄想にとらわれ、自身の危機管理能力さえ失っていた。もしかしたら、わたしも運が悪ければこの男に襲われていたかもしれない。

マウスを操作し、記事を下へとスクロールしていく。

――また、男は重度の知的障害を持つ側面もあり、動機や殺害方法も曖昧な上、「女の子は鬼に殺された」など、供述内容にも意味不明な点が見受けられる。宗教関連への疑いは今現在も認められない。専門家は「法廷は精神遅滞の性質に配慮すべきだ」と警鐘を鳴らす。

この男も同じように、わたしのことが鬼に見えていたのだろうか。

――T署の会見では、男が「強姦目的の勢いで殺してしまった」と供述していることを明らかにしており、「本人には最低限の理解力がある。殺意は確定的だ」と述べた。また、物的証拠をさらに明らかにすべきとし、同署は調べを進めている。

記事はここで終わっている。目を離し、胸のうちにもやもやを残しながら吉村さん見上げた。彼はニュースを今一度読み返すと、肩をすくめてソファへと歩み寄っていった。

「警察って、たまに矛盾したこと言うよね。被疑者の供述は意味不明だって明示したくせに、殺意だけは明らかだと言い張るんだから」

わたしは湯呑みのお茶を口に含み、飲み込んでから尋ねた。

「この人が、奈緒ちゃんを殺したことになってるんですか？」

「少なくとも強姦はしたんだ。現場や遺体に精液の痕跡もあったらしいからね。しかしなにより、記事にあったように殺人の物証が見つからない。警察もこのまま冤罪まで持っていくつもりだろう」

「物証なんか見つかるわけないよね」咲子さんがだるそうな声で合いの手を入れる。

吉村さんは深くうなずき、ガラステーブルの上にあのクーラーバッグを置いた。

「全ては、これが警察に見つかっていないのが原因だ」

「こんなニュース、わたし、今まで知りませんでした」

「報道規制が掛かったんだよ。誰が知りたいと思う？ アイドルのような扱いを受けた華やかな女の子の凄惨過ぎる最後を」

わたしは唾を呑み込み、二の句を継げずに黙り込んだ。わたしだって、出来ることならこんな事実、知りたくなかった。

「被疑者が重度の精神遅滞者だってことは記事の通り。ちなみに彼、初公判は欠席したらしいよ。弁護士の話によると、裁判の呼び出し状や催促状を理解出来なかったためらしい。独り身の浮浪者だったし、付き添い人や立会人もいなかった」

「それも、こういうマイナーなニュース記事にあったんですか？」

それに答えたのは咲子さんだった。

「吉村くんのお兄さんは弁護士なの。この男の弁護を担当してるんだってさ」

「兄貴も結構苦労してるみたい。強姦までは知的障害を盾に弁護できても、なにしろ、被疑者のコミュニケーション能力につけ込んで警察が供述調書をでっち上げてるんだ。ひどい出来レースだね。法廷の荒れっぷりったらないって、兄さん頭抱えてた」

こんなことになったのが誰のせいかわからない、それはまごうことなく、殺人の証拠をいつまでも隠し持つ吉村さんたちのせいだろう。市民としてどれだけ間違っただけの行為をしているか、彼らは理解しているのだろうか。

「法律は弱者の味方だけど、実際はどうだろう。都合や世間体が優先される中、誰が罪を犯したかなんて、さして民間は求めない。早期逮捕、早期解決、そして一番重要なのは、罪がどのようにして裁かれるかだ」

テレビでは、土曜夕方のドラマ再放送が始まっていた。咲子さんが興味を示したように半身を上げ、呑気に画面に見入る。日常的に展開される風景に寒気がして、わたしは思わず口を開いた。

「殺したのはわたしなんです。どうして見過ごすんですか？ どうして、この人が殺しの罪まで押しつけられなきゃいけないんですか」

「小夜ちゃんがそこまで言うなら、警察に届けられないこともないけど」

何も言えなくなる。そんなわたしに、吉村さんは軽く笑いかけた。

「冗談だよ。今さら提出したって、僕たちも犯人蔵匿で罪に問われちゃうし」

「僕たちって、あたしも？」

「咲子さんにも決まってんじゃない。僕らはすでに立派な共犯です」

咲子さんは放心したように虚空をあおいだ。舐め切った飴の棒を手元の小型ゴミ箱に放り投げる。

「いいけどさ、今に始まったことじゃないし」

少しずつ状況が呑めてきた。同時に、わたしはひどくいたたまれなくなってしまう。

この二人は最初から、わたしを陥れるつもりなど毛頭なかった。むしろ、庇ってくれていたんだ。

今思うと、わたしの犯行は、なんと稚拙で杜撰だったのだろう。わたしの気もひどく動転していたし、あのバッグの異変にだって、わたしが所有していればきっと誰かに気づかれたかもしれない。

わたしは今まで、二人の動向に意識と気力を向け続けていた。犯した罪を振り返り、自己の罪悪感に囚われる暇もほとんどなかった。全ては、吉村さんと咲子さんがともに行動し、カップルの振りをして吉村さんのマンションに入り浸り、わたしの注意を扇動し続けてくれたおかげだ。

彼らに感謝することが正しいはずはない。でもわたしは、二人に向かって深く頭を下げていた。

。

「ありがとうございます」

奈緒ちゃんの手を返してもらえるなら、わたしは素直にお礼を言わなければならない。これでわたしは、安心して奈緒ちゃんの手を愛でることができるようになるから。

「まあ、お礼を言われるほどじゃない、っていうか」

吉村さんが何故か気まずそうにして、声を小さくした。咲子さんが何か発言しようとしたが、吉村さんは手で制してそれを黙らせる。

「小夜ちゃんには、謝らなきゃいけないことがある」

ソファを立つ。咲子さんの前を横切り、テレビに近づく。

テレビの後ろには、隠されるように小型の冷蔵庫が置いてあった。腰の位置にも届かないほどの小さな冷蔵庫。それを引っ張り出すと、吉村さんはその上に手を添えた。

「ここに、奈緒子ちゃんの手を保管していた。でも、咲子さんと呼んだ初日、カレーに使うお肉が無くて」

それが何を指すのか、まだ何の予測も浮かんでいない。それなのに、わたしの手は羽織ったパーカーのポケットに差し入れられていた。

「ちょっと拝借しちゃったのね。そしたらもうびっくり、これが案外美味しくて。さっきさ、最近毎日がカレーだったって話したよね」

言うと、彼は取り繕ったような微笑を咲子さんに向けた。それに合わせるように彼女も薄く愛想笑う。

「食べちゃったんだよね。奈緒子ちゃんの手、全部」

冷蔵庫上部の蓋が開かれる。そこには空洞があり、紅色の痕跡がうっすらとあるだけ。奈緒ちゃんの手がそこにあったという、生々しい空虚感だけが横たわっていた。

全身が凍り付く。逆に、頭は熱でいっぱいだった。ナイフの柄を握る力が急速に増していく。奥歯が折れそうなほど歯噛みし、掠れる声で訊き返す。

「食べた……？」

奈緒ちゃんの手。尊く価値のある手。人としての品格すら切り捨て、食人鬼と化してまで勝ち取った、憧れの結晶。

「うん、ごめん。でも美味しかったよ。それに、これで君のこと、もっと理解してあげられるしね」

――ふざけんなっ。

そんな意味の悲鳴を上げ、わたしはデスクチェアを蹴った。ナイフを抜き、吉村さん目掛けて猛進する。

吉村さんまであと三歩という距離、突如、何者かにナイフを持つ手を捕られ、わたしの身体は瞬間的に宙を舞った。あっけなくナイフを手離し、まともに肩から落下する。痛み以前に、何が起こったのか理解できずに当惑する。頭を上げようとしたが、やはり誰かの手によって叩くように床へと押しつけられた。片腕を嫌な角度で固定される。暴れようとしたけど、曲げられた肘が痛くて無闇に抵抗できなかった。

「止めといた方がいいよ。咲子さん、馬鹿みたいに強いから。柔道六段に合気道七段」

「吉村くんには敵いませんけど」

わたしの背中に重しがかかる。かすかに見上げると、すぐ目の前に咲子さんの横顔があった。

「吉村くんのこと信用するなって言ったばっかなのに」

拘束が解かれる。咲子さんが立ち上がり、服の埃を払った。伏せたまま、わたしは吉村さんへと顔を向ける。彼は足元のナイフを拾い上げ、申し訳なさそうに言った。

「手のことで君がどれだけ怒るのか、試してみたくて。まさかここまでなんて」

嘘を吐かれたことへの怒りより、多大な羞恥心がわたしを支配した。奈緒ちゃんの手に対する執着をじかに見られて、恥ずかしさでこの場を逃げ出したいようになっていた。わたしは人の肉を欲する人外的な生き物なのだと、自意識の醜悪さをさらけ出したようなものだったから。

「奈緒子ちゃんの手は他の場所に保管してある」

「他の場所……？」

「恐らく、君もそこに保管しようと考えたはずだ」

彼の言葉は確信に満ちていた。とてもはったりを宣っているとは思えない。でも、どうして吉村さんがあの場所を知っているんだろう。

咲子さんはソファに腰掛け、新しい飴を口に含んでいた。吉村さんも彼女の向かいのソファへと腰掛ける。ナイフがテーブルの中央付近に置かれた。

「好きなところに座って。もう少しだけ、君から聞き出したいことがある」

おずおずと全身を起こす。身体の痛みはほとんど残っていない。それがちょっと不思議だったけど、わたしは大人しく咲子さんの隣に座った。

しばらくの沈黙の末、吉村さんが口火を切る。

「実は小夜ちゃんのこと、色々調べさせてもらった」

意表を衝かれ、抗議しかけた口を閉じる。彼らがわたしの考えた保管場所に検討をつけ、そこに運んだということは、もう全てに気付いているのだろう。

「表沙汰にはなっていないみたいけど、君のお母さんはニュースキャスターをやっていたそうだね。それも全国的に有名な、半分、タレントのような活動まで兼ねていた」

ゆっくりとうなずき、肯定する。

「しかし七年前のある日、彼女は忽然と姿を消した。それも、そこに居たという形跡すらないほど鮮やかに」

それ以上の核心に触れず、吉村さんは閉口する。わたしのそばにコーヒーのマグカップが寄せられる。咲子さんからだった。まだ口つけてないよ、と彼女は言う。

吉村さんが次の事実確認を取る。

「次に、君のお父さんのことについて。不躰なことを訊くけど、君のお父さん、事故で片足を失くしたんだってね。一般車道で車を運転していて、大型トラックと前面衝突したって話だけ」

黙って首を縦に振る。

「君もその車に乗っていたというのは？」

「たしかです」

「だったら不可解だ」

吉村さんは太もみに両肘を乗せ、両指を絡ませた。真剣な目でわたしを見据える。

「君が保護されたのは、事故現場から二百メートルも離れた河川敷の一角だったそうじゃないか」

どうしてこの二人がそのことを知っているのか、わたしとしてはそちらの方が不可解だけど、事実は事実なので否定できない。わたしは今まで通りの常套句で回答する。

「事故があってすぐのことで、当時のわたしは幼かったし、ほぼ無傷の状態だったし、その場に居るのが怖くなって逃げただけです」

「普通に考えればそうだね」

普通に考えれば、たぶんそう。だけどこの二人は連想づけたのだろう。八年前のお母さんの失踪と、五年前のお父さんの事故とを。

「この二つの件について、咲子さんが面白い推理を立てていてね。僕のような想像力の乏しい者からすれば、怖気のあるような推理だけど。残酷だけど、君が話してくれないなら、咲子さんから語ってもらうよ」

「結構です」

わたしは咲子さんの無表情を一瞥し、きっぱりと言い放つ。

「二人の想像は間違いなさそうなので、それならこの際、わたしが本当のことを話します」マグカップを傾け、息を整えて続ける。「ただし、このことは口外しないでもらえると、ありがたいんですけど」

「もちろん、三人だけの内緒にする。分かった？ 咲子さん」

吉村さんに同意を向けられ、咲子さんは当然というようにうなづく。

わたしはもう一度コーヒーを飲んだ。強烈な苦みの中に、ほんのりとシロップの甘味がする。ぜんぜん違うけど、味わいとしては若干あれと似ている。

鈍色の光を放つナイフへと視線と落とし、わたしは口を開いた。

小学生のわたしは、いわゆる箱入り娘というやつでした。滅多に外に出してもらわず、箱の中で卵のように育てられるという、あれです。

たとえば、吉村さんや咲子さんは、幼児時代にどんな思い出がありますか？

普通ならたぶん、幼稚園や保育園で同年代の友達に囲まれて有意義に過ごすと思います。

わたしは、そのどちらにも通いませんでした。ずっと家の中にいて、ベビーシッターや家庭教師にお世話してもらっていました。外に出たり、公園やプールで遊んだりという経験はすこしもありません。他の子供たちと交流した覚えもないです。

両親が過保護だったという理由もあり、お母さんは報道のお仕事で、お父さんは大学の教員だったので、必然的にわたしに構える時間が少なかったからだと思います。

さっき、幼稚園や保育園に通うことが有意義だと言いましたが、そのときのわたしは別に、その生活が有意義でなかったとは思いませんでした。幼い子供は、大人に囲まれて育つものだと思っていたからです。

小学校には、受験を経て入学しました。首都圏内の大学キャンパス内にある国立小学校です。入学前、両親に一つだけ約束させられました。

――お母さんのお仕事のことを周りの子たちに話してはだめだよ。

お母さんは、朝や夕方の報道番組でニュース記事を読む仕事をしていました。誰でも一度は目にするような、いわばテレビの看板みたいなひとです。

なので、特に悪いことはしていないのだけれども、テレビに映るお母さんをネタにして面白がり、わたしを馬鹿にする子が必ず現れるからだ、という理由からだったのです。

わたしは言いつけを守りました。というか、同世代の子供たちと遊んだ経験のないわたしに、そもそも最初から友達なんか出来っこなかったんです。約束は自然と守られました。

わたしが小学校に入る頃、お母さんのお仕事は、単なるニュースキャスターというカテゴリーを飛び越えていました。タレントや役者活動をしたり、報道キャスターとしても、自ら世界中に出向いて現地レポートなどをしていました。身をていして世界情勢を提供するお母さんの姿に、日本中の人々はいたく感心させられたようです。

そんなわけで、わたしにとってのお母さんは、普通のお母さんとはイメージが違います。

母とはお茶の間に居るものではなく、お茶の間のテレビの中に居るものだということです。

お母さんと会えるのは二、三ヶ月に一度くらいでした。

お母さんはいつもサングラスや帽子をしていました。有名人だから当然です。

素顔を見せるのはレストランに入ってからです。高層ビルの最上階にあるような、個室のレストラン。そこなら誰にも素顔を見られず、落ち着いて食事ができます。

両親そろって物識りで優しいので、その滅多にないお母さんとの食事は、わたしの悩みや質問に答えてもらう相談コーナーみたいになっていました。

そして、最後は必ず、お母さんがお話を聞かせてくれます。世界中をレポートして得た経験をもとに、とても価値のあるお話をしてくれました。

面白くもあり、勉強にもなり、ときには涙するような感動話も聞かせてくれました。かけがえない、貴重なひとときでした。

恥ずかしいけど、二人には正直に告白しておきます。

わたしは、お母さんの大ファンでした。

――笑わないでください、吉村さん。

小学三年生のあるとき、お父さんが海外の大学まで出張した時期がありました。期間は一ヶ月だとか、そこらだったと思います。

お母さんは常に家にいないので、ホームシッターを呼んでいました。小学校の送り迎えにホームシッターのお姉さんが来るのは恥ずかしかったけど、もとよりわたしは、学校時間外で他の子たちと遊んだことがなかったので、生活サイクルはほぼ変わりませんでした。

そんな生活が始まって、一週間ほどが経ってからでしょうか。

突然、家にお母さんが訪ねてきたのです。

そうですね。帰ってきた、というより、訪ねてきたという感覚です。

ドライブにでも行こうよ。お母さんがそう言いました。いきなりのことで訳が分からないながらも、うれしいことに変わりはないので、わたしは快諾しました。

次の日は学校をお休みして、お母さんと二人きりでドライブに出かけました。お母さんと一緒に居られることに、わたしは興奮しっぱなしです。

どこへ行くの、そう尋ねてみると、

内緒よ、とお母さんはかわいらしく笑いました。

高速道路に乗り、とあるパーキングエリアに入りました。

ここでお留守番しててね、と言いながらお母さんが車を降りました。

戻ってきたお母さんの手にはペットボトルのジュースがありました。べつに喉の渴きをうったえた覚えはないのですが、飲み物を買ってきてくれたようなのです。

――怪しいですか？　そうですね。こうして物事を抽出して語れば、怪しく聞こえるのは当然ですよ。

ジュースを飲んだ途端、急激な眠気が襲ってきました。

目を開けると、信じられないことに、わたしは独房の中にいました。

岩壁が上下左右を埋め尽くしており、ある一面に鉄製の扉があるだけです。

扉には顔の大きさほどの四角い穴が開いています。鉄格子やガラスなどは嵌まっていませんが、何しろ小さな窓なので、そこから出ることはかないません。

窓から覗くと、真っ暗な空間が広がっていました。どうやらそこは地下だったようです。扉を叩くと、ごおんごおんとした音が空間に響いていきました。

扉の真横には電気のスイッチがあります。見上げると、こぶし大の白熱電球が垂れ下がって

ました。明かりがなくなるのは怖いので、いつとき、スイッチに触るのは止めておきました。

独房の隅にはがらくたが積んでありました。そのほとんどが家電製品の残骸か、壊れたおもちゃかぬいぐるみです。しかし、ゴミ倉庫というにはあまりにも中途半端な造りの部屋で、やはり、そこは独房と表現するしかありません。

きっとわたしは、何者かに誘拐されてしまったのだと思いました。窓の穴に顔を押しつけ、お腹の底から声を出しました。泣きながら、何度も何度も、お母さんやお父さんと呼びました。

なんの反応もなく、わたしの声は地下の暗闇に吸い込まれていくばかり。すぐに声が枯れ、しだいに、喉が干からびていきました。

ふと見上げると、天井に小さな穴が空いていました。そこから、少量ながらも水が漏れ、岩の壁をまっすぐと伝っていたのです。地面には小さな水たまりが出来ていて、少しずつ、割れた岩の隙間へと流れていっているようでした。

地面にあるものなど、わたしは口にすることがありません。行儀が悪いし、お腹を壊してしまうからです。

だけど、そのときはそうも言っていられませんでした。両手を水たまりに差し、ひと掬いだけ飲んでみました。錆びた鉄のような味です。ぎりぎり、飲めないことはなかったんですけど。

怯えてばかりではいられないので、まずはがらくたの山を漁ってみました。

携帯電話がないかと期待したのですが、むろん、そんなものが都合よく捨てられているはずがありません。そもそも地下なので、使えるかどうかもあやしいです。

古くさいラジオを見つけました。手のひらくらいの大きさと、一応、電池も入っていたようでした。しかし、これも使えないに決まってる。

分かってはいるものの、わたしは藁にもすがる思いでラジオをいじくりました。スピーカーからは、絶えずぎざぎざとした不快音が流れます。

諦めかけたそのとき、なんと、ラジオが電波を受け取りはじめたのです。FM放送の一局のみで、音もかなり不鮮明でしたが、それでも受信しました。ほんと、不思議ですよ。

スピーカーに耳をくっつけて、流れ出す雑音に聞き入りました。

最初は音楽番組でしたが、やがてニュースが始まりました。

もしかしたら、わたしが誘拐されたニュースが流れるかもしれません。幼いながらも、少しでも情報を得なければ、とわたしは考えました。まあ、結局、そのときはわたしに関するニュースなど一切流れませんでしたけど。

電池がもったいないので、一度ラジオの電源を切り、壁を背にして座り込みました。

窓の外を見つめて、誰かが顔を出すのをしばらく待ってみることにしました。

それで、わたしは少し寝ていたようです。

目を開けると、扉の窓にお母さんの顔がありました。お母さんは、とくにこれといった表情を浮かべておらず、わたしの様子をじっと眺めていました。

歓喜に震え、わたしは声をあげました。扉にかけよります。扉越しに、やっとお母さんと対面

。まだ生きてたの？ お母さんはそう言いました。

あれから三日も経ったのに。

お母さんの言葉が信じられませんでした。わたしの中では、閉じ込められてからまだ半日も経っていないという感覚だったからです。

そういえば、とお腹をさすると、びっくりするくらい真っ平らなのが分かりました。途端に空腹感を覚え、扉にべったりくっついてお母さんにすがりました。

お腹が空いたの。早くここから出して。

わたしの声が聞こえていないみたいに、お母さんは静かに独房の中を覗き込みました。やがて、あの水たまりを目に止め、舌打ちをしました。

あら、水があったの。よかったね小夜。水があるのとないのとでは、餓死する期間もだいぶ違って来るわよ。ほんのちょっぴり、長生きできるわ。

がし？

自分の耳が、自分のじゃないみたいでした。目の前のお母さんも、お母さんじゃないみたいでした。あれは、お母さんの皮をかぶった誘拐犯だったのでしょか。

それっきり、お母さんは独房に姿を見せませんでした。日にちの感覚はやっぱりありません。人間は、お日さまを見なければ一日の長さを推し測れない生き物なのだと知りました。

最初はひどい空腹感で目眩まで起こしていたのですが、やがて、胃に穴が空くような腹痛がしてきました。胃酸がのたくりまわり、内壁を削るかのようです。

とても立ってられなくて、わたしは地面に横になりました。お腹がぐるぐると渦巻くようで、とにかくなにか詰め込まなければだめだと思い、がらくたの破片で地面を削り、砂を食べました。

気持ち悪くなって、すぐに吐いちゃいましたけど。

さらに時間が経つと、今度は頭が割れるような頭痛に襲われました。頭の中をいじくりまわされてるみたいでした。酸化液で脳を溶かされるような、殺人的な頭痛です。

ラジオで現在の日にちを聞きました。お母さんとドライブに出かけて、もう九日が過ぎているようでした。

この頃になると、例の頭痛や腹痛に悩まされることはなくなっていました。代わりに、食べたいという欲求も失せ始めていたのです。

四六時中ねぼけ眼で、景色が歪んで見ええました。頬に触ると、骨の感触をありありと感じ取れました。手や足は青ざめています。

身体の芯から力が抜け、もはや立つこともできません。地面にずっと当てていた腰あたりの血が滞って、じわじわとした痒みが常時へばりついていました。

初めのころ、ものを食べられないという現状にひどく恐怖したのですが、そんな原始的な感情も徐々に薄れていきました。なにかを考えることにさえ無気力で、生に対しての執着を奪われて

いくような感じですよ。

ラジオの番組で数回、お母さんの出演する番組を聴きました。

お母さんは、ある紛争地域の現地レポートを終えた体験談を語っていました。

お母さんは特に、紛争の中で生きる子供たちに注目していたようです。

飢餓で悩まされる世界中の子供たちのために、日本でももっと、支援の意識を持たなければいけない。そんなことを語っていました。なんとも、滑稽ですね。

出演者の大御所演歌歌手が、お母さんにこんなことを尋ねました。

――もしあなたにお子さんが居たら、飢餓で苦しむ子供たちの現状について、どう教育してあげますか？

お母さんがそれになんと答えたか、うまく思い出せません。お母さんらしい、もっともな答えを返していたように思います。

もしあなたにお子さんがいたら。

その演歌歌手が、彼女を人の親だと知らなかったための発言じゃありません。それもそのはずですよ。お母さんは、世間的には天涯独り身だと認識されていたのですから。

そうです。わたしは、この事実を知らなかったわけではありません。今まで、知らないふりをしていただけです。

わたしは本来の意味での箱入り娘ではありません。隠されるように育てられただけだったんです。望まれない子供だったんです。少なくとも、お母さんには。

それが身に染みて分かってしまうと、もうどうでもよくなってきて。

やっぱりそうなんだって。

それなら、このままでいいやと思えてきて。

砂だらけのまつげを拭うこともせず。産まれる前に戻りたくて、膝を抱いて、まあるくなって

。

やがてラジオが生命を失っていくように、わたしの鼻先で静まり返りました。

わたしは目を閉じていました。眠りから覚醒していましたが、しばらく閉じたままにいました

。

何故なら、瞼の上からかかる陽光が眩しすぎたからです。

全身が柔らかいものに包まれていました。懐かしくて温かい、お布団の感触です。

ふいに、誰かがわたしの頭を撫でます。光に慣れて目を開けると、そこにはお父さんがいました。優しい笑みを浮かべ、お父さんがわたしの頬を撫でていたんです。

助かったのだと知りました。わたしは、たしかに生きていたのです。

起き上がってお父さんに抱きつきたかったけど、起き上がる気力がありません。

お父さんが水を飲ませてくれました。薄れた視力が戻ってくると、自分がまた、見知らぬ場所に居るのだと知りました。

ログハウスのような一室です。丸太組みの古めかしい部屋。頭上でベージュのカーテンが揺れ

、窓の外に木漏れ日を見ました。

お腹が空いただろう。

お父さんが優しく問いかけました。わたしはかすかにうなずきます。お父さんはホワイトシチューのお皿を手にしていて、スプーンをわたしの口元に近づけてくれました。真っ白な液体の中に、きれいな褐色をしたお肉があります。

食べなさい。

口に含むと、未知の味が舌の上に広がりました。美味しい、という範疇を超えていたように思います。わたしは弱々しくも感動して、がらがらな声で尋ねました。

これは、なんのお肉？

お母さんだよ。

牛肉だよ、とでもいうようにお父さんが答えました。

なるほど、だからこんなに気分がいいわけか。正常を欠いた思考で納得し、口の中のお肉をよく噛みしめました。

お父さんにお肉を多めにお願いして、何杯もシチューを食べさせてもらいました。

今まで飢餓状態にあったというのに、胃はすんなりとお母さんを受け入れてくれます。わたしを死の寸前まで追い込んだはずのお母さんを、どうしてだか歓迎していました。

やはり、美味しいという感じはありません。食べる、という感覚とも違います。

みなぎるとか、吸収するとか、身体に取り込んでいくという感じでした。食物を蹂躪し、支配するような気分です。相変わらず起き上がれないくせに妙に力であふれていて、地を這う虫けらから天上の神にでも昇格したような、途方もない全能感で満ちていくのです。

気付けば、わたしは泣きながらお肉に感謝していました。何故、ここでこうして、わたしがお母さんを食べているのか、その全てを理解しました。

この感覚を味あわせるために違いありません。最高の状態で、自分を食べてもらうためだったんです。

この件で、お母さんを一瞬でも軽蔑したことを、わたしは後悔しました。お母さんはやはり世界一尊敬できる人物だったんです。わたしのために自分の全てを差し出してくれた、とても偉大な母だったんです。謝ったり、感謝したりしたいけど、彼女はもうこの世にはいません。

お母さんが行方不明になった事件はしばらく世間を騒がせましたが、一年もすると、人々の記憶から消え去ってしまいました。

いまだに年に一度、お父さんと遠くへお出かけします。お母さんを食べた日を祝って、キャンプをします。

一種の謝肉祭でしょうか。

九話

話に一区切りをつけ、わたしはコーヒーをすすった。冷え切ったコーヒーは苦みをさらに増している。

隣を見ると、咲子さんが苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。やっぱり、変なやつだと思われちゃったかな。

顔を上げると、吉村さんと目が合った。その瞳には、わたしが映っていた。合わせ鏡みたいに何重にも重ね、わたしの全てを知り尽くそうとするようだった。

彼の目に鬼が映っていないことを信じて、わたしは話を続ける。

お父さんを食べようとした話。

ヘッドライトが照らし出す夜道の先。お父さんの握るハンドルが、唐突に右へと切られたことを覚えている。

タイヤとアスファルトが擦れる音に心臓が跳ね上がった。前方に迫る巨大な塊。

バックミラー越しのお父さんの目は驚きに見開かれていたけど、口元の歪みまでは隠しきれなかった。わたしは悟った。

「お父さんは死ぬつもりだったんです」

視界が横倒しになり、かき混ぜられ、重力が未体験に傾く。走馬灯などは無く、全て一瞬の出来事。そんな中で頭をよぎったのは、自分がこの程度で死ぬはずがないということ。何故かわたしは、ここで死なないという自信があった。

「身体中が擦り傷だらけだったけど、わたしは生きていたし、目の前にはお父さんの一部がありました」

たしかに、お父さんは死ぬつもりだったのかもしれない。だけど、わたしまで殺そうとはしなかった。だって現にわたしは生還していて、眼前には、献上されるようにお父さんの足が転がっていたのだ。きれいに、膝から下だけになった右足。

きっとお父さんも、お母さんと同じように、わたしに自分の身をささげてくれたんだ。そう確信した。

「どうすればお父さんの想いに応えられるか、それだけを考えました」

お父さんの右足を胸に抱き、誰も居ない場所へと駆けた。お父さんはてっきり死んだものだと思っていたから、お父さんはわたしに命を託してくれたものだと思っていたから、一切脇目を振ることなく、前だけを見据えて走った。

やがて川のせせらぎを聞きつけ、わたしはそれを目標に進んだ。風に揺れる夏草の河原。黒く澄んだ清流を発見すると、まずお父さんの右足を丹念に洗った。

泥だらけの上着も一緒に洗浄し、水を絞って右足を拭いた。赤ん坊を撫でるように優しく、寶石を磨くように丁寧に。

月光の薄明かりに照射されたお父さんの足は、青白く輝いて見えた。まだお父さんの体温が残っている。直前まで血が通っていた、もしくは命をたぎらせていた証拠。

冷めないうちに、はやく食べなきゃ。

「結局、一口も食べられずに、あえなく駆けつけた警察に保護されてしまったんですけど」

はにかんで笑う。反して吉村さんの表情は変わらなかった。

「その後、わたしは精神科病院に入れられてしまいました」

「それも、運悪く中学受験の時期と重なってしまった」

吉村さんは分かりきったことのように言った。今ばかりは、わたしが彼に苛立ちを覚えることはなかった。

「お医者さんは、たまにいい加減な診断をします。わたしを変人のように扱い、狂った獣を見るかのような目を向けて。こんなの、おかしいです。わたしの何を気味悪がるのでしょうか。愛情のために両親を食べた、あるいは、食べようとしただけじゃないですか」

わたしは奈緒ちゃんの人生を奪った人殺しだけど、理由もなく彼女を殺したりなんかしなかった。

欲望のままに屍肉を欲するのが鬼なのだとしたら、やっぱりわたしは鬼じゃない。

「普通じゃないみたいに。人でなしみたいに。頭のおかしいやつみたいに。ひとを、病人扱いして……」

お母さんのことも、お父さんのことも、奈緒ちゃんのことも、簡単に言葉にできるような動機なんてない。一つの答えを出そうだなんて、わたしは、そんなに単純にはなれない。失望も羨望も感謝も好奇心も復讐心も支配欲も、全部全部、食べたいという気持ちに繋がった。人が持つ当たり前の思いを込めた食人ならば、だったら、わたしだって人間でいられるはずだ。

あれから一週間が経った。

ある日の土曜日。

梅雨前線が近づいていて、春のほどよい温風はなりをひそめていた。

動きやすい服装に着替えてバッグの中身を確認する。お父さんの部屋に行き、彼の車いすを押して家を出た。

お父さんの運転する車で吉村さんのマンションまで彼らを迎えに行った。吉村さんと咲子さんはすでにマンション前で待っていた。吉村さんは手ぶらで、咲子さんは小振りなショルダーバッグ一つだった。

車を玄関前に横付けすると、お父さんが車から顔を出し、二人に軽く会釈をした。

今日は、この四人で遠くへお出かけすることにしている。奈緒ちゃんの手がある場所だ。

わたしが人を殺したことをお父さんに知られるのは気が引けたけど、それすら今更な気がしてくる。わたしは結局、こうなる運命だったのだと思う。

朝早くに出発したのに、目的地に着いたのはお昼を過ぎた頃だった。

到着したのは富士山麓の鬱蒼とした森林地帯。ある湖が見えてくる。まわりを樹木で囲まれた清閑な場所。

初夏の太陽が照りつけ、林からやってくる湿った空気があたりを支配していた。きり雲が山を覆い、景色が幻想的に映える。

ここまで移動疲れで不機嫌そうにしていた咲子さんも、このきれいな湖の風景にいくらか元気を取り戻したようだった。徐行する車の窓から顔を覗かせ、細っこい腕を伸ばして湖畔のログハウスを指さした。

「あれだよね」

「そうです。毎年、キャンプのときだけここに来ます」

ログハウスの前で車が止まった。車いすを用意して、お父さんを運転席から降ろしてあげる。お父さんは穏やかな笑みを浮かべるばかりで、終始無言だった。

ログハウスに近づいてみると、ベランダの窓が割られていて、吉村さんが以前侵入した痕跡なのだと分かった。

「ごめんね。そろそろピッキングの練習しなきゃなあ」

吉村さんが苦笑した。不法侵入そのものについての謝罪じゃなかったけど、わたしはとくに言及しなかった。

このログハウスはお母さんが若いころに買収したものだ。今は年に一度しか使わないので、クモの巣だらけになっているはずだけど、今回はそうでもなかった。吉村さんによってあらかじめ払われたようだ。

ダイニングの奥にはベッドがあり、その上で、真っ黄色にくすんだカーテンが揺れていた。も

とも、鮮やかなベージュ色だったもの。

「ここで、君は初めてお母さんを食べた」

歴史遺産におとずれたみたいな口調で吉村さんが言った。

テーブルのそばでお父さんが静かに目を閉じていた。カーテンを開くと、昔と同じやわらかな木漏れ日がさし込んできて、お父さんのやつれた頬にほんのりと落ちた。

「あれを、見てくるんだろう」

お父さんの言葉に、わたしたち三人は誰ともなくうなずいた。

吉村さんが廊下へと足を向けた。わたしと咲子さんも彼のあとについていく。

ダイニングを抜けた廊下の途中には物置部屋がある。扉を開けると、ほこりの蔓延した空気が奥から放たれた。

部屋には使い古しの布団や段ボール箱が積みあがっていた。吉村さんが隅っこの荷物をどける。そこには、不自然に色落ちした畳が敷いてあった。

彼は畳に指をかけ、それを慎重に上へと押し上げていく。地下へと続く階段が、いよいよ白日のもとにさらされた。

「よく、これを見つけましたね」

「不法侵入を決め込んだ瞬間から、違和感みたいなものを感じていたから」

そのとき、背後から咲子さんの控えめな声がした。

「あたし、ここで留守番していい？」

「だめ」

吉村さんのつめたい反応に彼女は不服そうに黙り込んだが、おとなしくわたしに続いた。

腐りかけの木製階段を降りていくにつれ、すこしずつ、外界との光源と切り離されていくのがわかった。この二人がいなければ、わたしはこの独特の寂莫感を懐かしんだらう。

地下に明かりはない。咲子さんが持参した懐中電灯だけがたよりだった。

「かえりたい。幽霊出そう」

後ろから明かりを照らしながら、咲子さんがぶつくさ漏らした。それに応える者はいない。わたしたちの間で、徐々に口数が減っていくのを感じた。

ひと一人分しか通れないほど幅狭な地下道を進む。光の玉がゆらゆらと揺れ、壁際にぽつぽつと横並ぶ鉄扉が見え隠れした。わたしを十日以上も閉じこめた扉は、今ではあっけないくらい錆び付いており、当時の堅牢さもすっかり衰えていた。三人の足音が両の岩壁に反響し、わたしの耳にはなんとなく、誰かの悲鳴のように聞こえた。

地下道が行き止まる。

わたしたちの前に、重厚な鉄門扉が整然とたたずんでいた。独房とはまた違う、揺るがしがたい存在感。今居るこの場所とは隔絶された何かが、その先にはあった。冷気が扉の間から漏れ、わたしの火照った指先をすぐさま冷却する。

吉村さんが扉に手をかけた。

「開けるよ」

止まった時間が動き出す。

毎年この扉を開けるたびに、わたしはそういう錯覚に囚われてしまう。

扉の向こうには広さ六畳ほどの空間がある。しかし決して移住空間などではない。

六方を埋め尽くすコンクリートの壁は、その全面が厚い氷の膜に覆われていた。奥には数台の小型保冷庫が並べられている。気づけば、口から白い息が立ちのぼっていた。奥歯がかちかちと鳴る。動きや呼吸を少しでも止めれば、人間なんてすぐに氷漬けにされてしまいそう。

ここには、死の温度が存在する。

自然が生み出す気温とは違う、あくまで食物の保管のみを目的とした冷徹な温度。

寒さのあまりか、咲子さんがわたしを抱き寄せ、わたしを湯たんぽ代わりにした。身長差があるので、わたしのこごえた頬が彼女の首筋に当たった。

吉村さんが自分の両腕を抱きながら、一番右端の保冷庫に近づいた。扉を開け、そこから、わたしの待望を取り出す。

「今まで勝手に取り上げて、悪かったよ」

寒さのためか、再会の感動のためか、わたしの手は震えていた。

「いいんです」

咲子さんに抱かれた腕から抜け出し、わたしはそれを受け取る。薄い霜の張った二本の腕。青白くなった肌を軽く撫でつけ、優しく表面をならした。

手首、手の甲と指を滑らせ、美しい指先へと手を伸ばす。形のいい人差し指を握り、白い息を当てた。

「奈緒ちゃん……」

尊い両腕を胸に抱く。服の上からでも伝わる冷えた感触。奈緒ちゃんが寒さをうったえているように思えて、わたしは彼女の右手の親指を口に入れた。アイスの棒みたいにしゃぶって温めてあげる。凍り付いてもなお、すべすべした滑らかな突起がわたしの舌をついた。憧れ続けた指先は、憧れに負けなくらい完璧な形状と舌触りをもたらしてくれる。

ぱちっ、ぱちっ、と視界が瞬いて、奈緒ちゃんの演奏会が鮮明に甦る。天の遣いが創り出す奇跡の音色、神さまが生み出した完成型が、わたしの口の中にある。

唇を離すと、唾液が糸を引いて垂れた。奈緒ちゃんの親指からかすかに湯気が立ち上る。

ふと見ると、吉村さんがある一点を見据えていた。そこには、一際目立って大きな保冷庫があった。彼の横顔に問う。

「あれの中は、もう見ましたか」

「いや、僕もそこまでの無粋はできないよ」

後ろからくっついてくる咲子さんをひきずって歩き、保冷庫に手をかける。積年をかけた氷のインフラが解かれ、扉がめりめりと音を立てて開く。

保冷庫内の永久凍土。人工の氷結晶体。

その中に、首から上だけのお母さんが居た。氷の中で凍結し、時間を止めたお母さん。安らかに目を閉じ、わたしと同じ目線の高さで浮遊するように静止している。

ただいま、とわたしは声をかける。

吉村さんか咲子さんのどちらかが、短く感嘆の息を漏らした。

わたしはお母さんから目を離さない。

「毎年のキャンプで、お父さんと一緒に、お母さんを食べ続けました」

初めて食べたのが右の上膊だった。人の身体で一番おいしいのがそこらしい。

次の年が右掌と左ふくらはぎ。次が乳房とお腹周り。翌年、また翌年と続けて。

「どうやら今年が、最後みたいですけど」

最後は頭部。わたしの大好きなお母さんの顔。お茶の間のお馴染み。全国民が一度は目にしたことのある、親しみ深いお母さんの顔。世界に誇る、日本の玄関だ。

今夜でお母さんは完全にこの世からいなくなる。わたしたちのもとから離れてしまう。このままずっと、お母さんを食べて命と生気をつないでいけたらいいなと思っていた。それが今年で終わるのが悲しくて、わたしは次の目標を無意識に探してしまったのかもしれない。でも、奈緒ちゃんへの愛情がまがいものだとも思えない。

すくなからず、わたしの中に鬼の食性が宿っていることは認めてもいい。だけどこの敬意と愛情だけは忘れてはいけない。野蛮な鬼になってしまわないように、人としての最低限をつなぎ止めるために。

「少しだけ、一人にさせてください」

小さく懇願すると、やがて咲子さんの腕が離れた。二人の足音を背中にしながら、胸のうちに奈緒ちゃんを抱きなおし、お母さんと向き合い続けた。

ダイニングに戻ると、吉村さんと咲子さんの姿はなかった。お父さんが車いすから立ち、キッチンに片手をついて調理道具の準備をしていた。

「あの二人はもう帰ったよ。近くのバス停まで歩いて帰ると言っていた」

一家団欒を邪魔したくないそうだ、とお父さんが告げた。それを聞いて、わたしは少し残念に思った。ちょっとくらいなら、彼らに分けてあげてもいいと思っていたからだ。

「手伝ってくれ、小夜」

お母さんと奈緒ちゃんを腕に抱えながら、お父さんに歩み寄る。歩くたびに、お母さんの顔と奈緒ちゃんの手がお腹にこすれ、溶けた氷が身体を冷やした。お父さんはそれを見下ろし、うっすらと微笑んだ。

「食事の準備をしよう」

「咲子さんって、なーんかいつも飴食べてるよねえ」

咲子は顔を上げる。今年の四月に転校したばかり女子生徒が目の前にいた。彼女は咲子の机に両肘を置き、しきりに猫っぽい目をしばたかせた。

女子生徒の名前を思い出そうと頭をひねっているうちに、そうだ、と慌てる。

「あ、ううん」チュッパチャプスをぽんと口から出し、鈍すぎる返事をした。「好きだからね」

そして、また口に戻す。ついでに名前も思い出した。小峰真由。

「マユも、飴ほしいなあ」

ファーストネームを一人称に使う時点でそこそこにイタい人物だと予想できるが、この小峰真由も例外ではない。黒目がちの大きな瞳、セミロングにパーマをあてた海草みたいな髪型、そして、思わず殴りたくなる感じのアヒル口。

咲子は出しかけた手をポケットに引っ込めた。自覚はある。フルでここに居る自分より、二年から編入してきた小峰真由の方がクラスに馴染んでいることに。

特に彼女は、男子生徒と男性教諭からの支持率が高い。この猫目も、ふわふわなわかめヘアも、アヒル口も、外見からしてモテそうな雰囲気がある。性格はおっとりしていて、要所所で抜けている。勉強は壊滅的にできない。天然素材のナチュラル・バカ。だからか、どこか憎めないところもあって女子側もすんなり彼女を受け入れてしまっている。

一方の咲子は、高校デビュー失敗のなれの果てだった。いまだにクラスに友達がいない。この小峰真由が話しかけてくるという状況も嫌みにとれてしまうのだ。

気分を害しながら咲子はポケットを探る。三角形の感触から、恐らくいちごみるく。割と好きな飴なので癢だったが、無言で真由に差し出す。

真由が目を輝かせた。いちごみるくの包装をやぶり、すぐさま口に放り込む。口角がご機嫌そうにつり上がった。

「咲子さんって、本当に吉村さんと別れちゃったの？」

「別れた。遊ばれてたっぽいし」

例の女子中学生との一件であの男と恋人同士の振りをしていたが、学内ではよほど衝撃のカップルだったらしい。いまだに噂に尾ひれがついて回り、生徒たちは咲子に真意を尋ねてくる。

遊ばれていたというのは、言葉通りの意味でなくても事実だろう。なので咲子は、破局の原因をわざと吉村の評判が悪くなるように答える。

学生鞆を手にしてさっさと机を立とうとすると、真由も咲子にならって立ち上がった。

「一緒に帰ろう」

「えー」

「えーってなに？ 帰ろうよ」

「あたし、これから部活があるんだけど」

「咲子さんって、部活なにしてるの？」

咲子はしぶって答える。

「文芸部」

「ブンゲー部！」

真由がトーンを上げて復唱した。咲子は頬をひくつかせながらも、なんとか平静を保つ。

「あと、兼部でたまに将棋部にも……」

「ショーギ部！」

「もしかして、馬鹿にしてる？」

真由はきょとん顔をして、高速で両手を振った。残像が見えそうだった。

「ぜんぜん。意外だな、って思っただけ」

「意外？」

「だって、咲子さんって一匹狼ってイメージだし。部活なんかやってなさそうだもん。馴れ合いとかくだらねー、みたいな。マユ、そういうのずっと憧れてたんだあ」

憧れと聞いて、またあの女子中学生の顔を思いだしてしまう。自分も目の前の女に狙われてしまうかもしれないと考えると、咲子はさらに彼女と距離を置きたい気分になった。

「決めた。マユも文芸部に入る」

真由は決意に満ちたような、期待の眼差しを咲子に向けた。文芸部という独自のサンクチュアリを形成していた咲子にとって非常に思わしくない展開だった。真由を追い払う術を一心に思案した。

まず、文芸部は顧問の教師が常時不在である。部員は咲子の他に二名のみ。部室の片隅でしこしこ小説を書く文豪気取りの眼鏡男子が一人。もう一人は幽霊部員兼、絶賛自宅謹慎中だ。文化祭はまだまだ先なので特筆してやることなく、無理して部室に顔を出す必要もない。

真由が部室までついてくるか、このまま直帰してしまうか、二つのパターンを天秤にかけて考えてみればおのずと答えは出てくる。

咲子は廊下の真ん中で踵を返した。

「あー、今日部活ない日だった。帰ろ」

「そうなんだ。部活は明日紹介してね」

「うん。ばいばい」

咲子は鞆を肩に提げて早足で進む。不安になって後ろを見ると、やはり真由も笑顔でついてきていた。

「お願いだから一人にさせて」

「マユ、咲子さんと友達になりたい」

「なんであたしなの？ ていうか、なんで小峰さんまで下の名前にさん付けで呼んでくるの？」

「マユって呼んで！」

真由がヒステリックに叫ぶと、廊下を歩く生徒の視線が一斉に集まった。むろん咲子も仰天して足を止める。真由が口をへの字に曲げ、目で抗議した。

「……真由」

冷や汗混じりに言うと、真由の唇がアヒルのくちばしを形作った。

それからというもの、真由の奇特的なストーカー振りはエスカレートしていき、なにかと言い訳をつけて文芸部侵入を阻止していた咲子も半ば観念してしまい、不本意ながらも彼女を部室に招待することになってしまった。

初めて文芸部に訪れた真由は、物珍しそうに室内の本棚群を眺めていた。一応部長である咲子は、副部長の眼鏡男子が新入部員を一切見ようもしないことに苛つき、長机で原稿用紙に向かい続ける彼の頭を小突いて、自己紹介と部の活動説明を強要させた。

文芸部の活動は精力的である。メインは二ヶ月に一度の部誌を制作することで、毎回図書室で配布することになっている。部誌といっても、眼鏡男子の自慰的連載小説がページの八割を占めてしまうので、咲子の請け負う仕事は本の装丁と数ページの自由制作くらいのものだ。十月の文化祭では部員一人一人が個人制作をしなければいけない。小説でも詩でも絵本でもなんでもいいが、最低限のクリエイティブさが要求されるので中々敷居が高い。

他にも、図書委員や司書教師との関わりが深いため、月に一度は図書委員会議に参加し、蔵書リストの点検や利用者の要望に応える検討案を求められたりする。さらに眼鏡男子などは、頼みもしないのに毎度のこと地方の文学コンクールに応募しているようだ。怖いくらい意欲的だが、彼はほとんど趣味でやっているようなものなので、無視していい。

ここまで部の説明を受けて、真由も少しは気が引けたのではないかと淡い期待を持つが、そんな咲子の思惑に反して、むしろ彼女は燃えてしまったようだった。

「堤さん。マユ、がんばります！」

真由はパッションに満ちた目をして眼鏡男子と熱い握手を交わした。

「頑張りたまえ、小峰くん」

同い年なのにやけに偉そうなのが彼らしいいうざったさなのだと思いつつ、咲子は脱力し、部室の隅っこで与謝野晶子のエッセイを広げた。部誌の締め切りが近い。本当なら新入部員に構っている時間などないのだ。

真由の登場により、再び来たる波乱の予感を払拭できない咲子だった。

水曜日。

放課後が始まり、一直線に教室を出ようとしたが、またしても小峰真由が退路を塞いだ。部活に行こう、と誘ってくる。一応、毎週水曜は部の活動は休止することになっているが、彼女にとって部の休日など意味を為さないらしい。部誌に向けた絵本制作に熱中しているようだ。

「あたし、これから大事な用があるんだよ。部活なら一人で行け」

嘘を吐いて誤魔化そうとするが、鈍い真由には通じない。

「そうなの？ じゃあ、マユも今日はおとなしく帰る。どっか寄り道していこう」

「だから、なんでいつもあたしなの。一緒に帰ってくれる友達なら、他にもいっぱい居るでしょうが」

「マユは、咲子さんじゃなきゃ、嫌」

「はあ、きもちわるい」

真由が泣きだしそうな顔をした。咲子はばつが悪そうに口を嚙む。

「帰ろうか、一緒に」

「やった！」

真由がぱっと笑って諸手をあげた。計算ずくの泣き顔だったのだろうか。しかし、天然バカの彼女に計算する知恵などあるはずがない。

逃れる方法を模索していた咲子は、生徒玄関で吉村浩介と鉢合わせしたことではっとひらめく。真由を押し退け、吉村の腕をつかんで捕獲した。彼は不意をつかれたようにびくりと震え、戦々恐々振り返る。

「なんだ、咲子さんか。久しぶり」

「吉村くん、助けて」

「なにが？」

咲子の背後の異変に気づいたのか、吉村が首を伸ばして真由を覗いた。真由は不満げに片頬をふくらませていた。

「別れたんじゃないかったの……」

「残念。たったいま復縁しました」

事情を察したように、吉村が咲子の腕を振りほどいた。

「咲子さん。そんなだからいつまで経っても友達が出来ないんだよ」

「余計なお世話だ」

「あと君さ、僕のこと変な風に噂してるだろ。軽いとか遊んでるとか。最近やたらとクラスの女子たちから避けられるんだけど。恋人ごっこの件はもう謝ったはずよね？」

「軽いのも遊んでるのも事実でしょ」

「いや、それはそうかもしれないけど……」

吉村は困り果てたように目を細め、こめかみを掻きながら咲子と真由を見比べた。

「とにかく、その子を置いてけぼりにするのはあんまりだ。構ってあげなよ」

「じゃあ、吉村くんもついてきてよ。あの子の話し相手になってあげろ」

「なんで僕が」

吉村的には真由の存在は好奇心をそそられないらしい。ここまで消極的なものだから間違いない。ここで真由が元気よく挙手した。

「マユ、そこのクレープ屋さんに行きたいです」

早くもこの三人で行動する気のようなだった。クレープ屋とは、校門を出てすぐの、国道向かいにあるクレープ屋台のことだろう。

二人の返事を待たず、真由は生徒玄関を出ていく。吉村と咲子は顔を見合わせ、嫌々ながらも彼女の後を追った。

国道を渡り、客の一人もいない寂しいクレープ屋台に着くと、真由はわずか数秒で注文を決めた。チョリソなどのソテーをカレー風味で生地包んだ、受け狙いとしか思えないような激辛クレープだった。もちろん、咲子たちからは一笑たりとも笑いを買うことはできなかった。

ベンチに三人で並んで座り、激辛クレープに激しく後悔する真由は、うらめしそうに吉村と咲子の頬張る普通のクレープを凝視した。やがて、彼女は胃の不調をうったえる。

「お腹痛い。マユ、トイレ行ってくる」

女子として、しかも食事時にその発言はどうだろう。もはやかける言葉もない。

「店員さん、トイレどこ？」

「知らねーっす」

やる気のなさそうな屋台の男性店員があっさりと首を振った。もぞもぞと口をうごめかせ、何か思い出すように頭のバンダナをいじる。

「あーそっすね。たしかあれ、そこにコンビニがあったような。知らねーっすけど、たしか、ホラあそことか」

店員の指し示す方向を見やると、真由はまっさきにそちらへと駆けて行った。真由のウェーブした後ろ髪を見送りながら、咲子はぽつりとつぶやく。

「疲れるでしょ、あの人」

「そうだね」

「吉村くんより疲れるわ」

「そうだね」

気のない返事に訝って横を見ると、吉村がベンチの端まで寄っていた。彼の前には立て看板があり、顔より下を太陽光から防いでいた。

吉村の視線の先には真白商業の校門がある。あの位置取りからだと、校門を監視するにはちょうどいいのだろう。彼はきっと、三崎小夜の気分を味わっているのだ。

「小夜ちゃん、あれからどうなったと思う」

校門を捉えたまま吉村が真剣に問う。咲子は食べ終えたクレープの包み紙を折りたたみながら考えた。吉村の喜びそうな答えを探した。

「また新しいターゲットでも探してるんじゃないですか」

「僕はそうは思わない」

彼の反応は意外だった。

「彼女は変わるよ。今まで以上に勉学に励んで、父親を大事にして、誰かを尊敬して、常に何かに葛藤する。今の小夜ちゃんなら、同じ過ちは犯さない」

「分かったようなこと言うじゃん」

咲子はすぐに自分のひねくれた言い方を恥じた。吉村は変わらず、真剣に前を見つめたままだった。

「あの子ほど、人間らしい人はいないよ」

言い切ると、吉村はクレープの最後の一口を口にした。咲子は包み紙を折り続ける。無意識に鶴を折っていたことに気付く。

咲子は小夜のことを思い出していた。巨大な氷塊の中の首だけの母親と向き合いながら、小夜の瞳には様々な感懐が巡っていた。人とは違う愛情表現。小夜はずっとそれに苦悩していた。彼女は鬼ヶ島に籠もる鬼のようなものだった。周りから外れた鬼は、自分の島が見つければ迫害さ

れる運命にある。他人と違うことを恐れ、自分自身に嫌悪しながらも、彼女の食性がそれを阻害する。愛する者、尊敬する者を食べてしまいたいという欲求が抑えられない。

異常性癖を持つ者が必ずしも鬼というわけではない、と咲子は思う。自分の性癖に開き直ってしまうか、嫌悪し苦悩してしまうか、それだけで大きな違いが生まれる。

「本当はいい子なのにね、小夜ちゃん」

余情が溢れだし、咲子はふと口ずさむ。視界の端で吉村が小さくうなずいた。

騒々しい足音とともに真由が帰ってくる。もはや倦み疲れた咲子は顔も上げられない。慌ただしく彼女の隣に駆け寄ると、真由が鼻息をあくして手にした物を差し出した。

「咲子さんと吉村くんのファンからだって！」

彼女の手には高さ30cmほどのポリエステル製バスケットがあった。クマの柄が可愛らしくプリントされており、受け取ると、ひんやりとした温度が手のひらについた。

真由は喉元ほどの高さで手をかざし、身長のようなものを現してみせた。

「こーんな小っちゃい女の子でね、小学生くらいの子。あ、でも近所の中学の制服着てたなあ。それにしても、ファンだって！ ねえねえ、咲子さんたちって結構有名人だったりする？ 隠れファッションモデルとか？ 二人ともカッコイイもんねー」

真由の妄想はとどまることを知らないが、咲子と吉村は顔を見合わせてうなずき合う。真由を押し退かし、クレープ屋台から離れて二人でバスケットを囲んだ。

バスケットの蓋を開けると、中からもうもうと冷気が漏れ出した。不透明のタッパーがいくつか入っており、それを包み隠すように保冷剤がバスケットいっぱい敷き詰められている。その間に、一枚の便せんが挟まっていた。サンリオのキャラクターが端に描かれた、いかにも女子中学生らしい便せんだった。

咲子は便せんを広げる。丸っこく丁寧な字体で書かれた一文が、そこにあった。

『おすそ分けです』

吉村が短く高笑いをあげる。

「ブラックジョークだね」

いけない方向に強くなったなあ、と咲子は余計な憂慮を覚える。後ろから覗き込んでこようとする真由に場繕いの言い訳をして、咲子はそれとなくクーラーバスケットを吉村に手渡した。

あれから一週間が経った。

ある日の土曜日。

梅雨前線が近づいていて、春のほどよい温風はなりをひそめていた。

動きやすい服装に着替えてバッグの中身を確認する。お父さんの部屋に行き、彼の車いすを押して家を出た。

お父さんの運転する車で吉村さんのマンションまで彼らを迎えに行った。吉村さんと咲子さんはすでにマンション前で待っていた。吉村さんは手ぶらで、咲子さんは小振りなショルダーバッグ一つだった。

車を玄関前に横付けすると、お父さんが車から顔を出し、二人に軽く会釈をした。

今日は、この四人で遠くへお出かけすることにしている。奈緒ちゃんの手がある場所だ。

わたしが人を殺したことをお父さんに知られるのは気が引けたけど、それすら今更な気がしてくる。わたしは結局、こうなる運命だったのだと思う。

朝早くに出発したのに、目的地に着いたのはお昼を過ぎた頃だった。

到着したのは富士山麓の鬱蒼とした森林地帯。ある湖が見えてくる。まわりを樹木で囲まれた清閑な場所。

初夏の太陽が照りつけ、林からやってくる湿った空気があたりを支配していた。きり雲が山を覆い、景色が幻想的に映える。

ここまで移動疲れで不機嫌そうにしていた咲子さんも、このきれいな湖の風景にいくらか元気を取り戻したようだった。徐行する車の窓から顔を覗かせ、細っこい腕を伸ばして湖畔のログハウスを指さした。

「あれだよね」

「そうです。毎年、キャンプのときだけここに来ます」

ログハウスの前で車が止まった。車いすを用意して、お父さんを運転席から降ろしてあげる。お父さんは穏やかな笑みを浮かべるばかりで、終始無言だった。

ログハウスに近づいてみると、ベランダの窓が割られていて、吉村さんが以前侵入した痕跡なのだと分かった。

「ごめんね。そろそろピッキングの練習しなきゃなあ」

吉村さんが苦笑した。不法侵入そのものについての謝罪じゃなかったけど、わたしはとくに言及しなかった。

このログハウスはお母さんが若いころに買収したものだ。今は年に一度しか使わないので、クモの巣だらけになっているはずだけど、今回はそうでもなかった。吉村さんによってあらかた払われたようだ。

ダイニングの奥にはベッドがあり、その上で、真っ黄色にくすんだカーテンが揺れていた。も

とも、鮮やかなベージュ色だったもの。

「ここで、君は初めてお母さんを食べた」

歴史遺産におとずれたみたいな口調で吉村さんが言った。

テーブルのそばでお父さんが静かに目を閉じていた。カーテンを開くと、昔と同じやわらかな木漏れ日がさし込んできて、お父さんのやつれた頬にほんのりと落ちた。

「あれを、見てくるんだろう」

お父さんの言葉に、わたしたち三人は誰ともなくうなずいた。

吉村さんが廊下へと足を向けた。わたしと咲子さんも彼のあとについていく。

ダイニングを抜けた廊下の途中には物置部屋がある。扉を開けると、ほこりの蔓延した空気が奥から放たれた。

部屋には使い古しの布団や段ボール箱が積みあがっていた。吉村さんが隅っこの荷物をどける。そこには、不自然に色落ちした畳が敷いてあった。

彼は畳に指をかけ、それを慎重に上へと押し上げていく。地下へと続く階段が、いよいよ白日のもとにさらされた。

「よく、これを見つけましたね」

「不法侵入を決め込んだ瞬間から、違和感みたいなものを感じていたから」

そのとき、背後から咲子さんの控えめな声がした。

「あたし、ここで留守番していい？」

「だめ」

吉村さんのつめたい反応に彼女は不服そうに黙り込んだが、おとなしくわたしに続いた。

腐りかけの木製階段を降りていくにつれ、すこしずつ、外界との光源と切り離されていくのがわかった。この二人がいなければ、わたしはこの独特の寂莫感を懐かしんだらう。

地下に明かりはない。咲子さんが持参した懐中電灯だけがたよりだった。

「かえりたい。幽霊出そう」

後ろから明かりを照らしながら、咲子さんがぶつくさ漏らした。それに応える者はいない。わたしたちの間で、徐々に口数が減っていくのを感じた。

ひと一人分しか通れないほど幅狭な地下道を進む。光の玉がゆらゆらと揺れ、壁際にぽつぽつと横並ぶ鉄扉が見え隠れした。わたしを十日以上も閉じこめた扉は、今ではあっけないくらい錆び付いており、当時の堅牢さもすっかり衰えていた。三人の足音が両の岩壁に反響し、わたしの耳にはなんとなく、誰かの悲鳴のように聞こえた。

地下道が行き止まる。

わたしたちの前に、重厚な鉄門扉が整然とたたずんでいた。独房とはまた違う、揺るがしがたい存在感。今居るこの場所とは隔絶された何かが、その先にはあった。冷気が扉の間から漏れ、わたしの火照った指先をすぐさま冷却する。

吉村さんが扉に手をかけた。

「開けるよ」

止まった時間が動き出す。

毎年この扉を開けるたびに、わたしはそういう錯覚に囚われてしまう。

扉の向こうには広さ六畳ほどの空間がある。しかし決して移住空間などではない。

六方を埋め尽くすコンクリートの壁は、その全面が厚い氷の膜に覆われていた。奥には数台の小型保冷庫が並べられている。気づけば、口から白い息が立ちのぼっていた。奥歯がかちかちと鳴る。動きや呼吸を少しでも止めれば、人間なんてすぐに氷漬けにされてしまいそう。

ここには、死の温度が存在する。

自然が生み出す気温とは違う、あくまで食物の保管のみを目的とした冷徹な温度。

寒さのあまりか、咲子さんがわたしを抱き寄せ、わたしを湯たんぽ代わりにした。身長差があるので、わたしのこごえた頬が彼女の首筋に当たった。

吉村さんが自分の両腕を抱きながら、一番右端の保冷庫に近づいた。扉を開け、そこから、わたしの待望を取り出す。

「今まで勝手に取り上げて、悪かったよ」

寒さのためか、再会の感動のためか、わたしの手は震えていた。

「いいんです」

咲子さんに抱かれた腕から抜け出し、わたしはそれを受け取る。薄い霜の張った二本の腕。青白くなった肌を軽く撫でつけ、優しく表面をならした。

手首、手の甲と指を滑らせ、美しい指先へと手を伸ばす。形のいい人差し指を握り、白い息を当てた。

「奈緒ちゃん……」

尊い両腕を胸に抱く。服の上からでも伝わる冷えた感触。奈緒ちゃんが寒さをうったえているように思えて、わたしは彼女の右手の親指を口に入れた。アイスの棒みたいにしゅぶって温めてあげる。凍り付いてもなお、すべすべした滑らかな突起がわたしの舌をついた。憧れ続けた指先は、憧れに負けなくらい完璧な形状と舌触りをもたらしてくれる。

ぱちっ、ぱちっ、と視界が瞬いて、奈緒ちゃんの演奏会が鮮明に甦る。天の遣いが創り出す奇跡の音色、神さまが生み出した完成型が、わたしの口の中にある。

唇を離すと、唾液が糸を引いて垂れた。奈緒ちゃんの親指からかすかに湯気が立ち上る。

ふと見ると、吉村さんがある一点を見据えていた。そこには、一際目立って大きな保冷庫があった。彼の横顔に問う。

「あれの中は、もう見ましたか」

「いや、僕もそこまでの無粋はできないよ」

後ろからくっついてくる咲子さんをひきずって歩き、保冷庫に手をかける。積年をかけた氷のインフラが解かれ、扉がめりめりと音を立てて開く。

保冷庫内の永久凍土。人工の氷結晶体。

その中に、首から上だけのお母さんが居た。氷の中で凍結し、時間を止めたお母さん。安らかに目を閉じ、わたしと同じ目線の高さで浮遊するように静止している。

ただいま、とわたしは声をかける。

吉村さんか咲子さんのどちらかが、短く感嘆の息を漏らした。

わたしはお母さんから目を離さない。

「毎年のキャンプで、お父さんと一緒に、お母さんを食べ続けました」

初めて食べたのが右の上膊だった。人の身体で一番おいしいのがそこらしい。

次の年が右掌と左ふくらはぎ。次が乳房とお腹周り。翌年、また翌年と続けて。

「どうやら今年が、最後みたいですけど」

最後は頭部。わたしの大好きなお母さんの顔。お茶の間のお馴染み。全国民が一度は目にしたことのある、親しみ深いお母さんの顔。世界に誇る、日本の玄関だ。

今夜でお母さんは完全にこの世からいなくなる。わたしたちのもとから離れてしまう。このままずっと、お母さんを食べて命と生気をつないでいけたらいいなと思っていた。それが今年で終わるのが悲しくて、わたしは次の目標を無意識に探してしまったのかもしれない。でも、奈緒ちゃんへの愛情がまがいものだとも思えない。

すくなからず、わたしの中に鬼の食性が宿っていることは認めてもいい。けどこの敬意と愛情だけは忘れてはいけない。野蛮な鬼になってしまわないように、人としての最低限をつなぎ止めるために。

咲子さんの頭がわたしの頭へと寄りかかる。赤くなった鼻を二人同時にすすって鳴らした。

「手伝うよ」

吉村さんが厚手の手袋をして、室内の隅に置かれた工具箱を持ち出していた。中からアイスピックと金槌を取り出し、彼は微笑んだ。

バスルームでお父さんが死んでいた。

木と石けんの香りで満たされたフルユニット。脱衣所には車いすと衣服が丁寧に並べられていた。鍵は掛かっておらず、不審に思って、わたしはそのドアを開けた。ライトグリーンの大理石の浴槽いっぱいにお湯が張られ、その中にお父さんが居た。裸で膝を抱き、子宮の中で丸くなる胎児のごとく、眠るように溺死していた。あのときのわたしみたいに。

磨りガラスの窓が開け放たれていて、四角い光が浴槽に差し込んだ。ゆるい風が入り、水中のお父さんがゆがむ。光の反射角が入れ替わり、網目模様の水面が色や形を変えた。その様は幽玄的で、わたしは奈緒ちゃんの両手とお母さんの頭を抱いたまま、しばしその場に立ち尽くした。

肩に手が置かれる。うしろに首を巡らせると、吉村さんが肅として浴槽を見つめていた。

「どうする？」

わたしは少し考えてから答える。

「ここからは、一人にさせてください」

「わかった」

手が離れる。吉村さんはすみやかにバスルームを出て行き、いつもの足どりでダイニングへ戻っていく。軽い調子の声が聞こえた。

「帰るよ咲子さん」

「はあ、なんで？」

「僕らは黙って帰る」

咲子さんはしばらく訳が分からないという風に抗議した。わたしは息をひそめて佇立し、お父さんの寝顔を見つめながら待機する。やがて彼らの言い合いが終わり、帰り支度のさざめきが聞こえなくなると、わたしたちのログハウスは静寂に包まれた。

梅雨が終わりを迎えた。

兄と朝食を共にしながら、咲子は地元新聞を広げる。紙面の隅に小さく載った、ある記事に目を通した。穴が空くほど何度も読み返す。味噌汁から立ちのぼる湯気が途切れると、兄が急かすような視線をよこしてきた。咲子は新聞から顔を上げる。

「ねえ兄貴」

「んだよ、さっさと食え」

「うちの家族愛って、絞りカス同然だよな」

兄はぼかんと口を開け、空中で箸を止めた。妹の寝言でも聞いたかのような余所余所しい反応を見せる。かと思えば、大まじめな顔つきで茶碗に箸を置き、腕組みをして考え込む。なにか勘違いされていることは明白だった。

「お前、今日は学校サボれ」

今度は咲子がぼかんとする番だった。兄が清涼感あふれる笑みを浮かべた。

「たまにはドライブにでも行くか」

咲子は冷ややかに息を吐く。新聞紙をいい加減に畳み、音もなく箸を取った。

「いや、普通に学校いくわ」

「ざけんな」



――山梨で一家心中？

15日午後2時ごろ、本栖湖近くの山中ログハウスで、複数の白骨遺体と、神奈川県真白ヶ丘市の大学事務職員の男性（43）が死亡しているのを県警署員が発見した。また、同ログハウス内に居た長女（14）は昏睡状態で病院に搬送され、いまだ意識は回復していない。

調べによると、違法増築と思われる地下にて男性や白骨化した遺体が発見され、一階の浴室内には血の付いたナイフや包丁が発見された。遺書はいまだ見つからないが、いずれも室内に荒らされたような形跡が無いことから、警察は一家心中の可能性があるとみて遺体のさらなる身元確認を進めている。



放課後になって携帯を開くと、吉村からメールが届いていた。

『裏門で待ってます』

携帯を閉じると、前方にはにこやかに突っ立つ小峰真由が居た。四月に転校してきて、つい先日には文芸部に入部した咲子の追っかけである。

「咲子さん、部活いこ」

「悪いけどあたし、今日休むわ」

どうしてだというように真由が首を傾げた。咲子はスクールバッグを引っ掴み、理由も残さず立ち去っていく。真由が慌てて追いかけてきた。

「ずるしたら堤くんに言いふらしちゃうよ。堤くん怒るよ」

咲子はかまわず廊下を進む。眼鏡男子が不真面目な部員に注意喚起してくるほど他人に熱心なやつだとは思えない。彼は自分さえよければいいのだ。

容赦なく生徒玄関まで行き、ローファーを履いて振り返ると、真由が涙目でうらめしげにこちらを見ていた。さすがの咲子も心が痛み、後ろめたくなって、苦手な愛想笑いを無理矢理作り、軽く手をあげた。

「寂しくなったらメールでもしてよ」

それを聞くと、真由は無邪気な子供のようにお花満開で笑った。

「電話もする！」

空恐ろしいものを感じながら、咲子は苦々しい笑みを保ち続けた。真由に見送られながらそっと玄関を出る。

真由の顔を思い出すと、肌寒いような気持ち悪さを禁じえない。あれじゃ、まるで恋する乙女じゃないか。友情の尺度を計りかかぬ咲子だった。

裏門付近に人の気配はほとんどなく、壁に背をあずけて待つ吉村はすぐに見つかった。

特にこの季節になると、裏門から登下校を試みる生徒は居なくなる。門を抜けると右前方には雑木林があり、蝉や蚊でにぎわってそこに居るだけで憂鬱になってしまう。歩きづらい上り坂や下り坂、暗い車道やささやかな住宅地帯ぐらいしかなく、正門側と比べると交通の便も悪くて、なにより娯楽店や飲食店がない。明るいお日様を好む花の高校生たちには需要はないが、咲子にとってはこの殺風景な景観が逆にお気に入りだったりする。

吉村は腕に止まった蚊をデコピンで弾き返しているところだった。

「どうしたの咲子さん、死んだ魚みたいな顔して」

「目じゃなくて、顔なんだね」

どうしてこんな顔をしなければならないのか、面倒なので説明は省いた。端的に言えば、真由のストーカー振りにうんざりしてるからだ、の一言で済む話だったが、一言で済ませて「なんだそんなことか」程度の返しで吉村に侮られてしまえば、咲子の中の何かが崩壊してしまいそうだった。

微妙に顔をうつむかせ、吉村と並んで裏門を出る。

ただ、これ以上吉村から心配されるのは癪なので、咲子は無理を押し明るい話題を振る。

「天気がいいなあ吉村くん」

咲子が絞り出せる明るさは天頼み以外にない。おぼろげに農家経営の気分を味わう。

「やっぱり元気ないね。ちょっと猫背になってるよ」

背筋を正しながらも、咲子の心の芯は折れていた。

斑紋混じりの家の塀を抜けていくと、住宅街の片隅に隠れ家じみた喫茶店があった。何故か駐車場の奥にあり、洋風の一軒家を改築したような外観である。

店の前に設置されたベンチでは、高校生くらいの若い男性店員が煙草をふかしていた。客が来たにも関わらず、しかも未成年のはずなのに平気で煙を吸い続けている。いい加減な店なのだろう。なんとなく怖いので、咲子はそれとなく彼から視線を逸らした。

みすばらしい見た目とは反対に、店内は木造の明るい雰囲気醸し出していた。店奥のテーブルを選び、吉村と向かい合って座る。幅広な藤椅子は座り心地がいい。ただし、吉村の爽やかな笑みだけは不快だった。

「お洒落な店だろ」

「女の子とのデートで重宝しますって感じだね」

皮肉めいて言うと、吉村はとんでもないという風に片手を振った。

「咲子さんとのカップル騒動以来、ぜんぜんだよ。ていうか君だよな？ 僕のいかがわしい風説を流布してるの」

「風説っていうか、ほとんど事実でしょ」

吉村は困ったように細目を見開きつつ、「否定はしないけど」と弱々しくつぶやいた。

しばらく待っていると、先ほどの未成年喫煙店員がオーダーを取りに来た。

「注文は」

態度も目つきも悪かったが、咲子は黙ってメニューを広げる。

「アイ스티ー二つで」

吉村が勝手にオーダーした。不良風店員は小さくうなずいただけで、さっさとカウンターに下がっていく。笑顔の苦手な咲子も、あれはどうなんだというレベルだった。店の奥から「笑顔がない！」という女性店員のお叱りが聞こえた。

吉村がおかしそうに笑う。

「ほんと面白い店だよ。客足も少ないし、これからも密会はここでしょう」

「吉村さんと定期的に密会なんてしたくないんですけど。あたし暇じゃないし」

「まあそう言うなって」

吉村は膝の上に置いたスクールバッグのファスナーを開き、中から一葉のA4判茶封筒を出した。咲子はそれを受け取り、上目遣いで彼を見る。

「なにこれ」

「今日の本題。小夜ちゃんのその後について」

咲子は今朝の朝刊を思い出した。それを見越したように吉村が言う。

「もちろん新聞にも載ってたし、僕も読んだよ。地元新聞の端っこにこじんまりと収められていたね。一家心中だなんて嘘ばかり。あんなものは真実じゃない」

「こっちは真実だったの？」

「淡泊な新聞記事なんかよりは、よっぽどリアリティがあると思うよ。なんせ梶原さんが撮った

写真だからね」

「まだあのおっさんと繋がってたんだ」

とある写真家の顔を思い出しながら、咲子は封筒に目を戻す。封筒には切手も宛名もなく、薄っぺらい感触からは内容物の気配すら感じられない。口を開くと、中にはA4大の写真が一枚入っていた。後方に人がいないことをたしかめ、中から写真を取り出す。

息を吞んでそれに見入る。数グラムほどの写真がやけに重く感じた。現場を間近で体験するかのように感じるのは、この写真を撮った者の技量ゆえだろうか。禍々しいと言えば失礼に当たるし、不気味と呼ぶには神秘性をはらみ過ぎている。何も言えずに顔を上げると、吉村は遠い目で咲子の後方を見ていた。

振り返ると、そこには向日葵やハナミズキで彩られたオープンテラスがあった。あまりのまぶしさに目を細める。薄陽の入る場所にはよく合う草木ばかりが植え込まれていて、まるで一枚の絵画を切り取って現れたように思えた。

不良風店員がアイ스티ー二つを運んでくる。咲子は、グラスを淡々と並べていく彼を見上げた。

「店員さん。このお店、なんて名前だっけ」

「ソレイユっすけど」

「ソレイユ？」

彼は尖った目つきを細めて、何をそんなに気にかけるんだ、という顔をした。

「たしかフランス語で、太陽って意味だったと思いますけど」

「いい名前だね。ぴったりだと思います」

「はあ、どうも」

素っ気ない返事をして、店員はトレイを胸にその場を去っていった。満足して前に向き直ると、吉村がなにか当惑したように咲子の顔を見つめていた。

「どうしたの咲子さん。やけに社交的だね」

暗に普段の社交性のなさを指摘されたように思えて癪に障った。咲子は一度咳払いをする。

「別に。ただ確認したかっただけ。その、店の名前じゃなくて、あたしらが居る場所みたいな。分かんないかな。ああ、うちら太陽の下にいるんだなって」

「まったく分かんない。やっぱおかしいよ、今日の咲子さん」

咲子は茶封筒をばんと叩いてみせた。

「ちょっとだけ羨ましくなったの、小夜ちゃんのこと。この写真見たらさ、自分を見失いかけたんだ。不完全でいて落ちるところに落ちない、常に浮き足立つ自分が不安になったのさ。誰に憧れるでもなく、好きになるわけでもなく、ふらふら人を避けてばかり。他人に不感的なあたしこそが本物の欠陥なんじゃないかって、ちょっと思っちゃったの。それだけ」

吉村はまだ何か問い詰めたそうにしていたが、咲子は弁解に飽きてそっぽを向いた。自らの話し下手をこれだけ恨んだことはないし、今日はなにを言っても伝わらない気がした。特に、彼のような人間には一生分からないことなのだから。

困り果てて黙りこくる吉村を尻目に、咲子は改めて写真を見直した。

そこに映っていたのは暗い岩壁の一室。切れかかった裸電球が、有るか無きかの微光で独房を照らしていた。

地面には三崎小夜が横たわっていた。両親と思しき二つの頭を抱き、枕元には肉片のこびりついた人骨が山形に積み上がっている。山には、樹木から生える小枝さながら、陶磁器のような白い指先が突き出ている。小夜は心地よさそうに目を閉じ、なにか囁きかけるように緩く口元を開いていた。無音に身を任せると、写真の向こう側から聞こえてくる。彼女は三人の名前を呼んでいた。

閉鎖的な愛。憧れへの羨望。誰にも理解されない嗜好。退廃的なまでの独占欲。何一つ体感し得なかった叙情が流れ込む。咲子は息を吐いて焦がれる。幸せそうに笑う小夜に、いつまでも見とれた。

食人鬼

<http://p.booklog.jp/book/47990>

著者：小岩井豊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/koiwaiyutaka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47990>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47990>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.